空飛ぶ犬

ジラルダン夫人

遠山陽子訳

空飛ぶ犬

遠山陽子訳

95
9
2

國立國會
24.8. 2
圖書館

138693

はしがき

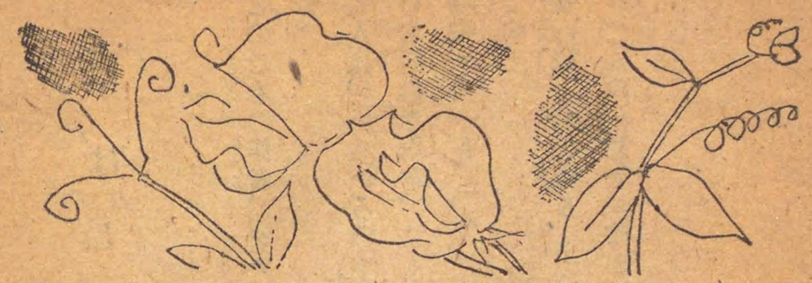
このご本の作者、ジラルダン夫人は、今から百年ばかりまえの、フランスの詩人であります。

夫人は、いろいろの小説などもお書きになりましたが、子どもたちのためにも、おもしろいお話のご本を、たくさんお書きになりました。

「空飛ぶ犬」も、「ねこになつたゾエちゃん」も、「コックさんの島」というご本にあるお話です。

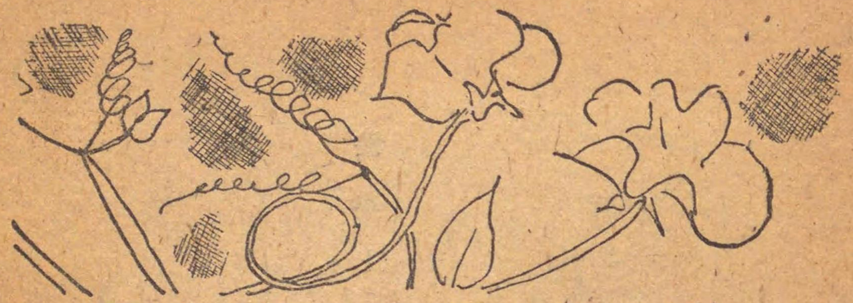
飛行機も飛行船も、まだまだ、かげもかたちもないころ、空を飛ぶことをかんがえついて、こんなお話をお書きになつたことを、たいへんおもしろくおもいました。

遠山陽子



空飛ぶ犬

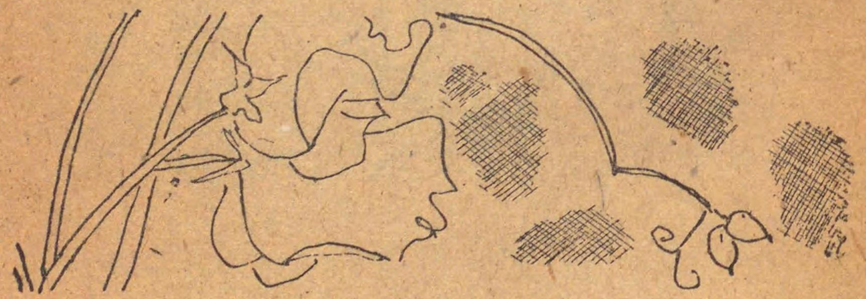
一、犬と小鳥……六
二、どっちにしよう……一三
三、ふしぎな花……一九
四、みにくい犬……二五
五、まほうのことば……三一
六、わすれては、あぶない……三五
七、なまえ……四〇
八、おひめさまのおしえ……四六
九、ひみつ……五〇
十、かわいいもの……五五
十一、お友だち……六〇



十二、空のむこうへ……七四

ねこになつたゾエちゃん

一、まほうつかい……八四
二、うすむらさきの洋服……八八
三、まほうにかかつたゾエちゃん……九二
四、ねこのきらいな人たち……九七
五、かなしいおいわい日……一〇三
六、手紙……一〇〇
七、こころみ……一一四
八、二どのためし……一二三
九、よいうそ……一三二



裝本と挿画

遠山陽子

一　犬と小鳥

バランクールのおひめさまといえば、そのころ、パリでは、有名な方でした。また、おひめさまは、めずらしいものや、すばらしいものをたくさんもっていました。その上、なににでもゆきとどき、おおようで、氣まえがよかったので、お友だちのたれよりも、ひょうばんがよかったのです。

このおひめさまは、きのどくな人たちをたすけるのにも、ふしぎな力をもっていました。そうしてまた、お友だちにもし心配ごとでもある時には、なんでもよく氣がついて、なぐさめてあげたりしました。とりわけ、子どもたちをよろこばせることがとてもお上手でした。このように、ふつうの人にはわからないことでも、なんでもよくおわかりになって、ちゃんとりっぱにおやりになるところは、まるでまほうの國のおひめさまのようでした。

このおひめさまは、パリから六十キロはなれたところに、すばらしいお城をもっていました。そこで、おひめさまは、一年中をすごしていらっしゃるのでした。

お城の中には、ひとりでに鳴り出すピアノとかふしぎな部屋とか、すてきなものばかり

があります。ふしぎな部屋というのは、だれでも、そのお部屋にはいると、とてもよい声で歌をうたうのがきこえてくるのです。そうして歌い手のすがたも見えないし、いったいどこから、その声がきこえてくるのかもわからないのです。

廣い庭には、いろいろな花が、春夏秋冬、いつでも、きれいに咲いていました。そうして、たった一人のお庭番が、水をまいたり、手入れをしたりしているだけなのでした。

こんなふうに、おひめさまのおすまいのお話を書いていては、きりがありません。

さて、この美しいお城へたずねてくる人人を、もっとひきつけるものがあります。それは、空までとどくほどの大鳥かごの中に、世界でいちばんめずらしい、いちばん美しい鳥たちがあつめられているのでした。小鳥たちの羽は、べに色や、にじ色や、るり色などで、まばゆいばかりきれいでした。

そうして、この小鳥たちのさえずる声は、それぞれちがっていて、しかもみんな、聞く人をうっとりさせるようなよいちょうしでした。みごとな格子のついた黄金色の鳥かごの中に、いろいろの小鳥がしずかにとまっている時は、ちょうど小鳥のぬいとりをした大きな金色の壁掛をながめているようでした。

また、おひめさまが狩をする時、その供ぞろいの美しいことにも、人人はおどろきまし

た。供ぞろいは、たくさんのりょう犬をつれていましたが、その犬たちは、うさぎりょう犬、足みじか犬、止り犬、テールヌーブ産の犬、伏せ犬、イギリス犬、トルコ犬など、方方の國の、いろいろの犬がいるのです。りっぱな犬小屋にいる、この紳士たちを、お城につかえている人人は、みな大切に世話していました。

おひめさまは、たいそう氣まえがいいので、めずらしい犬を、たびたび、お友だちにもおあげになりました。おひめさまは、お友だちのお家をおたずねになった時、その犬たちが、自分のことをわすれずにいて、まるでけらいのように、自分のいうことをきくのを見て、たいへんおよろこびになるのでした。

犬たちは、まるで王子さまのように大事に育てられているのでした。一頭ずつ、それぞれ教育がかりをつけて、すっかり科学的に教育するのです。狩をすること、ダンスをすること、投げたものをもちかえる術、それから足を上手につかって戸をしめることなどを、棒をもって練習させるのです。そうして、まだこのほかにも、いろいろの才能をみがいて、りっぱな狩犬にしたてあげるのです。

おひめさまのお友だちの子どもたちは、長いあいだお城にごぶさたしていることはできませんでした。そうして、お城へたずねてくると、お庭の小鳥を見たり、犬のダンスを見

たりして、お家へもどることをわすれてしまうほどでした。

レオンも、その子どもたちの一人でした。レオンは、日曜ごとに、おかあさんといっしょにお城へあそびにくるのですが、夕方になって、パリへかえらなければならない時には、いつも涙ぐんでしまいました。それほど、この美しい、たのしいお城とわかれるのがいやなのでした。

卒業式のあとのある日曜日、レオンは、いつものようにお城へ遊びにいきました。おひめさまは、いつもとおなじように、よろこんでむかえて、

「レオンよ、おまえがいい成績で卒業したことを、わたくしは、ほんとうにうれしく思いますよ。」と、しんせつにお祝いしてくれました。

「おまえは、ことしは、ふたつもごほうびをもらったのですってね。大成功でしたね。私も、何かお祝いをしなくちゃなりませんね。」

おひめさまはそういいながら、レオンをお庭の方へつれていって、鳥かごの前に立ちどまりました。

「この小鳥たちを、よく見てごらんなさい。どれでも、おまえのいちばんすきなのをあげましょう。」

レオンは、大よろこびで、いつまでも鳥かごの前に立って、あれがいいか、これがいいかとくらべてみていました。

その時、犬の散歩のじこくになったとみえて、たくさんの犬たちが、めいめい家庭教師をつれて、犬小屋から出てきました。レオンは、それを見ると、鳥かごのまえからはなれて、犬たちのところへかけていって、頭をなでたりなどして、いっしょにあそびました。

「おや、レオン！　おまえは、犬がすきなの。それならおまえに、犬をあげましょうか。」と、おひめさまがおっしゃいました。

「ぼくは、小鳥もだいすきです。」

と、レオンがこたえました。

「よろしい！　それならなんでも、おまえのすきなのをおえらびなさい。なんでも、おまえのすきなのをあげましょう。犬ですか、それとも小鳥ですか？」

おひめさまは、にこにこ笑いながらおっしゃいました。

「ぼく、両方ともほしいなあ。」

と、レオンも笑ひながら、しょうじきに思ったとおりをいいました。

「犬と小鳥ですって？」

レオンのおかあさんがびっくりして、大きな声でよこからいいました。「ぼうや、それは、あんまりよ。そんなによくばってはいけません。だいいち、ふたつのものを、いっぺんにお世話できませんよ。どちらか、一つをおえらびなさい。どちらでも、おまえのすきなほうをかうことをゆるしてあげましょう。」

レオンは、小さな口をとんがらかしました。だれだって、ふくれづらをしたところは、あんまりかわいいものではありません。

レオンは、そこで、鳥かごのところへかえっていって、あらゆる鳥を見なおしました。それからひきかえして、犬小屋の犬を見くらべてみました。けれど、どうしても、そのどちらかにきめるわけにゆきませんでした。

おひめさまは、レオンがまよって、犬と小鳥のどっちかにきめることができないでこまっているのを見て、お笑いになりました。なにしろ、両方とも、おなじようにすきなのに、その片方をえらばなければならないのは、たいへんむずかしいことです。

「それではね、レオン、おまえがどちらかにきめるのを、あしたの朝まで待ってあげましょう。私といっしょに、朝のお食事をたべに、ひとりでいらっしゃい。おかあさまは、たぶん、私たちのように、早くには、お目ざめにならないでしょうから。そうして、その時、すてきなことが、私たちを待っていることを、おやくそくしましょうね。」

レオンがゆっくり考えて、思いどおりにきめられるよう、おひめさまは、しんせつにこう助け舟を出してくださいました。

何かすてきなことが待っている！　レオンは、むねがわくわくしました。ひみつというものは、いつでも、かがやかしい希望で、子どもたちをよろこばせます。

二　どっちにしよう

あくる朝、まだうすぐらいうちに、レオンは目をさましました。きのう、おひめさまとおやくそくしたうれしいひみつのために、とても早起してしまったのです。さあ、はやくお城へでかけて、おひめさまにおあいしよう！　レオンは、ひとりで、さっさとしたくをすると、おうちをぬけだしました。

レオンのおかあさんが、夏のあいだくらしていらっしゃるおうちは、お城からだいぶは

なれた遠いところにありましたが、レオンがてくてくと歩いてお城についた時には、まだみんな眠っておりました。

レオンは、おひめさまがおめざめになるのを待っているあいだに、犬小屋から鳥かご、鳥かごから犬小屋と、いったりきたりして、どっちにしようかと考えていました。

「この赤い鳥の羽は、なんてきれいなんだろう。」

と、レオンは感心しました。

「あ、そうだ。小鳥にしよう。」

すこしたつと、また、ひとりごとをいいました。

「もし、犬をもっていたら、ずいぶんおもしろいだろうなあ。犬なら、どこへでもついてくるし、かわいがって、なでたりだいたりすることもできるし、狩にゆくこともできるし、いろいろの芸はするし！　だけど、小鳥は、何もよいことはありゃしない。ただ、きれいなだけで、鳥かごの中でうたっている、それっきりさ。」

しかし、やがてまたレオンは、思いなおしました。

「まちがいなしに、――犬をかっていることは、ありふれたことさ。犬なんて、だれだってかうことができる。けれども、南の島からきたきれいな鳥は、だれでももつというわけ

にはいかないからな。」

まもなくお目ざめのおひめさまは、レオンがまだまよっているのを見て、あきれてしまいました。

「どう、レオン！　もうきまって？」

「はい、ぼく、小鳥にきめました。」

「おや、おまえ、犬をえらばないの。わたくし、とてもりこうな犬をもっているんだけれど。」

「そんなら、ぼく、それにしよう。――おひめさま、あなたのおっしゃるとおりです。ぼく、やっぱり、犬にします。」

朝のお食事をしているあいだも、レオンが、いろいろまようのを、おひめさまは、おもしろがってお笑いになりました。

おつきの人が、レオンに近よっていいました。

「あなたさま、コーヒーになさいますか？　おこうちゃになさいますか？」

「おこうちゃ！」

レオンは、元氣よくこたえましたが、すぐいいなおしました。

「いいえ、コーヒーよ。ぼく、コーヒーのほうがすきだ。ぼく、お家では、どうしても、コーヒーは、のめないんだけど。」

といったかと思うと、またおこうちゃ、……いえコーヒー……。

それで、おつきの人は、大き

なおぼんをもったまま、レオンがふたつののみものをきめられないでまよっているあいだ、じっと立って待っていました。

「コーヒーとおこうちゃと、両方もってきておあげなさい。」

と、おひめさまがいいました。

「けさ、レオンは、くらいうちからおきて、さんざんうんどうしたのだから、とてもおなかがすいているわけだわねえ。」

レオンは、おひめさまが、なんでも知っていらっしゃるので、びっくりしてしまいました。そうして、だれもいわないのに、学校でごほうびをふたついただいたことまでごぞんじだったことを思い出して、――このおひめさまは、なんでもわかる、すてきな方だ、まったくまほうの國のおひめさまだ――と思いました。

お食事がすんでしまうと、おひめさまは、まじめな顔つきで、レオンにいいました。

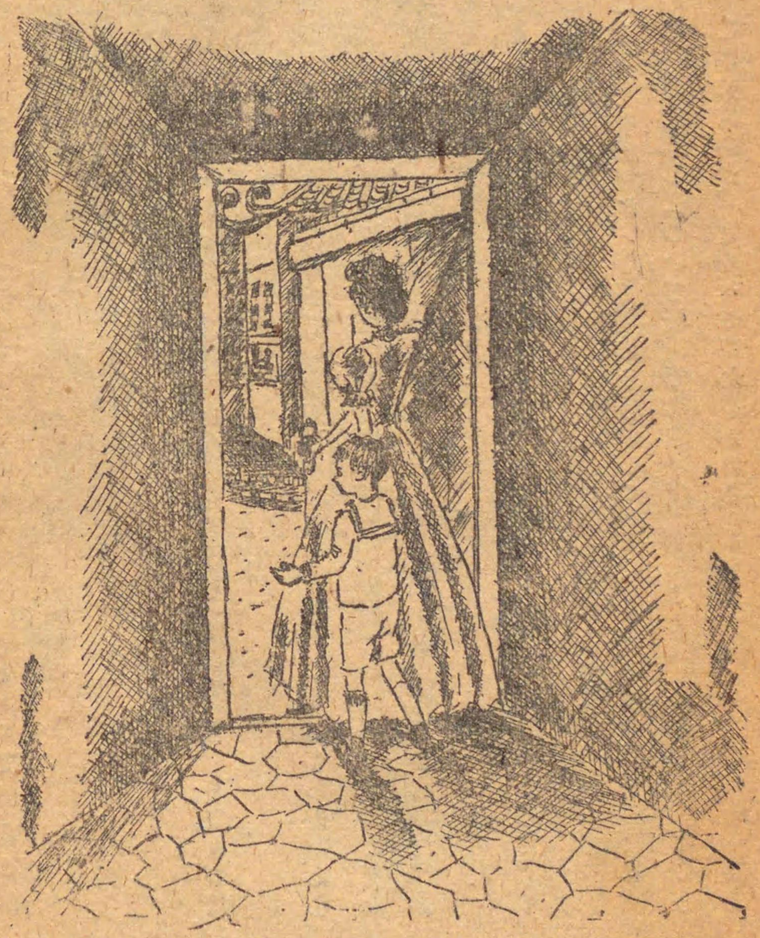
「わたしについておいでなさい！」

ふだんは、いつだって、レオンに、子どものように、したしいことばでお話するのに、きょうにかぎって……「わたくしについておいでなさい。」……などと、あらたまったことばでいわれたので、これには何か、とくべつなわけがあるのだろうと、レオンはかんじま

した。

おひめさまは、美しい手に、小さなぞうげのかぎをもって、かべのそばへいきました。そこには、かぎあなも何も見えないようでしたが、おひめさまが手をふれると、きゅうに戸があきました。

レオンは、お



ひめさまのあとについて、長い長いろうかを、十五分くらいも歩いていきました。このまっすぐなろうかは、まっくらでしたけれど、レオンは、ちっともこわいとは思いませんでした。やがて、おひめさまが、二ど目のかぎをまわす音がきこえたとたんに、すばらしいはなれ家が、川の岸にたっているのが見えました。

三　ふしぎな花

あかるい太陽の光に、きらきらとてらし出された、このはなれ家の客間は、五色の美しい色にかがやいている、すべすべした絹のきれではりまわされていました。そうして、この八角の客間の、八つの窓の窓ぎわには、すてきな日本のつぼがかざられて、いろいろな花や木がいっぱいにさしてありましたが、その見事なことといったら、レオンが見たこともないめずらしいものばかりでした。

「ノアロー、いないの？」

と、おひめさまは、はなれ家にはいりながらよびました。だれか、番人がいるのを、お

よびになったのでしょう。

「そこのよびりんを鳴らしてちょうだい。」
おひめさまが、レオンに、そうおっしゃったので、お部屋の中を、あちこち見まわしましたけれど、どこによびりんがあるのか、ちっともわかりませんでした。レオンがこまっていると、
「ほら、あの花をひとつ、つんでごらんなさい。」
と、おひめさまはにっこり笑って、さっきレオンが、あんまり美しいので、びっくりして、見とれていた、白い花の、鈴のような花ぶさをさしました。
そこで、レオンはいわれたとおりに、その花をつもうとして、枝にさわると、そのとたんに、すばらしく大きなかねの音が、カランカランと鳴り出したではありませんか。レオンは、びっくりして、とびさがりました。おひめさまは、レオンのあわてぶりをおかしがって、声を立ててお笑いになりながら、安心させるようにいいました。
「だいじょうぶよ、レオン、おどろくことはないわ。この木はねえ、フランスでは、だれも知らないんですよ。名は、すずゆりというんですよ。ほら、まるでつりがねみたいな形でしょう。とてもめずらしい草なのよ。さあ、こわがらないで、よく見てごらんなさい。」
おひめさまのことばにはげまされて、レオンはまた、大きなつぼの中にはいっている、

このめずらしい植物のそばへ近よりました。すると、おひめさまは、つづけさまに、あっちの花、こっちの花を鳴らしておもしろがりました。すっかり開いた大きい花は、教會の大がねのように、カランカランと、大きな音で鳴りひびきました。はんぶん開いた花は、学校のかねのように、ランランランと鳴りました。そうして、つぼみの花は、まるで山の子ひつじの首につけた、鈴のように、リンリンリンと、やさしいかわいい音で鳴りました。
おひめさまは、ほかのもっとめずらしい草や木をいろいろおしえてくださいました。そのひとつは、ザリガニという名でした。葉は、ヘリにぎざぎざのついた、大きなもので、ちょうど、セロリを倍くらいにしたものです。赤い長い花びらに、ポッポッと小さい黒い星が二つついているのが、まるで目のようです。それは、ほんとうに、ザリガニにそっくりでした。木のみきに、花がいっぱい咲いているところは、ザリガニがたくさんはいのぼってゆくようです。
すこしはなれたところにある、つぼの中の花を見た時、レオンは、それで、ちょっと遊びたいなと思いました。その花の名は「白いはねとラケット」というのです。この花のはばのひろい葉は、まったくラケットそっくりでしたし、白い花は、はねの形で、やわらかくふっくりしていて、いまにも、ふうわりととんでゆくように見えます。このはねなら、

子どもがおいばねについても、どぶの中などへは落ちないでしょう。というのは、おなじ一つの枝に、はねと、それをうけるように、ラケットがついているからです。

レオンはまた、もうひとつの大きな日本のつぼの中に、とてもかわった、おもしろい木があるのを見つけました。その花は、見ていると、ほんとうにおかしくて、つい笑いたくなるような花でした。

レオンが笑いだしたくなるのを、やっとがまんして見ていると、

「これはね、——大きな出べそ——またはぼうししゅろというんですよ。」

と、おひめさまがいいました。

それは、ほんとうに風変りな木でした。長いみきは、横にのびて、枝といったら、まるでおうむのとまり木のように、横にわたされています。そうしてその枝のいちばん先のところに、ちょこんと、おへそのような花がついているのです。わりに大きな花なのですけれど、まるで小さいぼうしのように見えるのです。この花には、いろいろの色があって、ばら、青、黄、赤、うすむらさきなど、ずいぶんきれいです。お人形のあたまにつけるのにちょうどよいこの花が、枝のさきに、ちょこんとついているのは、だれにだってすぐ、ぼうしやのかざり窓を思ひ出させるにきまっています。

こんなふうに、ふしぎなめずらしい花を見て、レオンはむちゅうになっていたので、だい一のよびりんで、おひめさまが、小さい黒んぼの番人をよんだことを、すっかりわすれていました。

「おひいさま、なにかご用でございますか。」

ノアローという黒んぼが、どこからか出てきて、おひめさまのまえにかしこまりました。

レオンはふりかえって、黒んぼをながめました。

すると、おひめさまは、

「ああ、ノアロー、ごくろうですが、金の犬小屋をあけて、とび犬を、ここへつれてきてちょうだい。」

とおいいつけになりました。

これを聞くと、いままでかねの音に氣をとられたらしいレオンは、

「とび犬ですって？」

と、びっくりしてきけました。

四　みにくい犬

「そうよ。あたしのぼうや。何をびっくりしているの。」

と、おひめさまがおっしゃいました。

「おまえは、犬にするか、鳥にするか、きめられないのでしょう。犬と鳥のどっちか、ひとつだけなのが、とてもざんねんなのが、あたしには、よくわかりますよ。なぜって、おまえのおかあさまは、犬と鳥と両方かうことをゆるしてくださらないんですものね。だから、つまり犬でもあり、鳥でもあるものを、おまえにあげましょう。」

「ほんとう？」

と、レオンはさけびました。犬でもあり、鳥でもある動物なんて、それはいったいどんなものだろう？……とにかく、ずいぶんすてきなんだろうなあ……と、レオンはわくわくして考えました。そうして、きっとかわいいうさぎ猟犬に、小さいつばさのはえてるような動物なんだろうと思いました。けれどその動物のはいるところは、鳥かごにしたらいいのか、犬小屋にしたらいいのか？　そのことを聞いてみようと思っている時に、ノアローが

「とび犬」をつれてお部屋にあらわれました。
そのありさまといったら!!
レオンは、このめずらしい動物に、すこしおせじをつかいながらも、つい、しかめ顔をしてしまいました。とび犬は、ちょっと見たところでは、とてもひどいかっこうをしています。長い耳をたれた大きな犬で、むく犬でもなし、毛長犬でもなし、ちんでもなく、毛むくじゃらの、せむし犬とでもいえばいえるのでした。首といったら、足のあいだにぶらさがっているようだし、こんなあわれっぽいふうをしていて、つばさがあるなどとは、どうして思えるでしょう。
「ほら、おまえの犬よ。」
と、おひめさまがおっしゃいました。
「鳥みたいでもありませんねえ。」
と、レオンはすこしうれしくなさそうにこたえました。
「あら! おまえ、あんまりうれしくなさそうね。正直にいってごらん。この犬のどういうところが、おまえの氣にいらないの?」
おひめさまは、すぐ氣づいてたずねました。

レオンは、なんといったらいいかと考えながら、ちょっとためらいました。心の中では、とてもひどいや……と思いながら。
「ぼくには、すこし大きすぎるように思うんですけれど……」
と、おどおどしてこたえました。
おひめさまは、にっこり笑っておっしゃいました。
「わるいところを、あんまり先にいうものじゃありませんよ。あとでたぶん、よいところがたくさん見つかるでしょう。」
そうしておひめさまは、小さい黒んぼに、レオンのわからない、よその國のことばで、何かひそひそとあいずをしました。ノアローは、うなづいて、はなれ家をとりまいている、お庭のまんなかに、犬をつれてゆきました。
おひめさまは、レオンの手をひいて、この客間を出て、お庭のベンチにこしをかけ、にこにこして、これからどういうふうになるかを見ていました。
……ぼく、こんなきたない犬、見たことがないや……とレオンは考えました。……ぼく、ほんとに、カナリヤにすればよかったなあ、そのほうが、どれくらいよかったか知れやしない、こんなきたないやつ、むく犬でもなければ毛長犬でもないし、種類のわからな

い犬なんて、いやになっちまうなあ。あっちの鳥かごには、あんなきれいな鳥がいっぱいいるのに、ぼくったら、どうして鳥をえらばなかったんだろう？……こんなことを、いろいろ考えているあいだに、小さい黒んぼは、みどりの芝ふのまんなかに、とび犬をつれてきて、しずかにその頭をなでてやりながら、むぞうさに犬の背中にのりました。

みにくい、ふしぎな犬は、とたんにたれさがっていた耳を、ぴんとつっ立てました。そうして、犬も人もじっとしておひめさまのいいつけを、おとなしく待っているようでした。小さい黒んぼのノアローは、とび犬の背中にまたがっていると、とてもりっぱな騎手に見えるのでした。

おひめさまは、やさしい目つきをなさって、おとなしく、とぶ命令を待っている犬に、まほうのことばをかけました。このことばは、まほうなのか、それとも、犬をしこむための合ことばなのか、たしかなことはわかりませんが、とにかく外國のことばのように聞こえました。

ナスゲッツ
ナスゲッツ

おひめさまがさけんだとたん、思いもよらないようなことがおこりました。犬は、きた

ならしい毛の中に、いままで折りたたんでかくしていたつばさを、さっとひろげました。どんよりくもつていたひとみは、まるでエメラルドのようにかがやきだしました。からだも、手足も、はりきつて、あたまからしっぽの先まで、いきいきとして、爪までが、あらわしの爪のようにするどく見えました。

犬はとびました。空の中をとびました。氣高く、いさましく、そのつばさでひょうしをとって、空氣をうったり、ひきさいたりする音がひびきます。もう、犬ではありません。それは、不死鳥のようでもあり、はげたかのようでもあります。

堂々としたそのありさま！　青空の下で、こんなに美しく、りっぱに見える動物は、ほかにはないと思われるくらいです。つばさの上にのった黒んぼの小さい頭は、青い空のなかほどで、ふしぎな絵のように浮きあがって見えます。そうして、ダイヤモンドの首かざりが、太陽の光にきらきらかがやいて、まるで、ひるまの星のようです。あまりのふしぎさ、美しさに、レオンは、ぼうっとして、どきどきしながらながめていましたが、もう、なにがなんだかわからなくなってしまうほどでした。

レオンのよろこばしげな、おどろきの顔を見ながら、おひめさまはおっしゃいました。

「どう？　レオン？　これでもおまえの犬は、まだ大きすぎると思うの？」

「これは鳥ですよ。世界でいちばんうつくしい鳥ですよ！」

と、レオンはさけびました。

「鳥だって、犬だって、そんなことはどうでもいいわ。ただ、おまえは、まだ大きすぎると思うの？」

「いいえ、いいえ。そんなことを思うものですか。もし、これより小さかったら、どうしてにんげんが乘ることができるでしょう。」

レオンは、赤くなってこたえました。

「おやおや、それじゃあ、私がいったとおりでしょう？　おまえははじめ、この犬をとてもみっともないと思ったでしょうけれど、それも、まちがっていたことがわかったわね。」

「ええ、ぼく、うまれてから、こんなすばらしいものを見たことがないや。ふしぎって、ほんとうにあるものなんだなあ。」

五　まほうのことば

犬のとんでいるのを目で追って、じいっと見ていたレオンは、みんなが、地面の上にお

りてくるのが待ちどおしくてなりませんでした。レオンの冒険心がむずむずしてきました。小さい黒んぼは、空をとぶのになれているので、どんなに高くとんでも、ちっともあぶなげがなく、かえってたのしげに見えるくらいなので、それにさそわれて、レオンも、散歩飛行をしたくなったのでした。

大空をひとまわりとびまわって、黒んぼをのせた犬は、だんだんひくくおりてきて、レオンとおひめさまの目の前に見えるようになってきました。

「ねえ、おひめさま、もしあの犬が、まだあまりつかれていなかったら、ぼく、ひとまわりためしてみたいんですけれど……どうでしょうか？」

「いいわよ、ぼうや、けれどもね、犬をうまくあやつるのには、どうしてもよくおぼえこんでおかなければならないことがあるのよ。とびあがってゆくとき、また空からおりてくるときに、ふたつのまほうのことばがいるのよ。このふたつのことばだけが、犬をさしずすることができるのよ。

ナスゲッツ

ナスゲッツ

とび出す時は、これを、二度だけいえばいいのよ。けれども、おりてくる時には、つぎ

のことばを、三どとなえなければいけないのよ。

アルダボロ

アルダボロ

アルダボロ

もしこれをわすれたら、おまえは、犬にのったまま、いつまでも、空のまんなかにいなければならないのよ。そうしてもし、そんなことにでもなったら、とてもゆかいではないのよ。」

レオンはうなづいて、ふたつのまほうのことばを、いくどもいくども、ためしにとなえてみました。とび出すときのナスゲッツ、これは、かんたんにおぼえられましたが、おりるときのことばはどうもむずかしくて、おぼえこむのに骨がおれました。何十度となくくりかえしてまねをしたり、発音をききかえしたりしなければなりませんでした。このおけいこのあいだに、黒んぼと犬は、地面の上におりてきました。

レオンは、かけよって、頭をなでてかわいがったり、犬や鳥にいう、やさしいことばをかけてやったりしました。そうして、ありふれた犬のするようなげいとうをさせようとしましたが、このとび犬は、くつ屋の犬や、かんぶつ屋の犬や、そのほかの町の犬のするよ

うな、わかりきったあそびやげいとうの命令なんか、ちっともききません。レオンは、つまらなそうに、そのことをおひめさまにいいました。

「いやねえ。」

おひめさまは、あわれむようにレオンを見て、おっしゃいました。

「わたしは、おまえに、こんなすばらしいものをあげたのに、おまえは、それがわからないで、つまらない、ありふれたものをほしがるのね。もしかすると、こんなりっぱな犬をもつねうちが、おまえには、ないのかもしれないわね。」

これをきいて、レオンは、自分がまちがっていたと思いました。

とび犬が、ゆっくり休んだあとで、レオンはその背中にまたがりました。そうして、とくいそうに、まほうのことばをとなえました。

ナスゲッツ
ナスゲッツ

犬はおとなしくとび立ちました。

六　わすれては、あぶない

レオンと、レオンをのせた犬は、見る見るうちに、大空高くとびあがってゆきました。おひめさまは、レオンが、まほうのことばをよくおぼえていて、まっすぐに空へあがっていっただいたんさにおどろいてしまいました。そのうちに、レオンはおそろしく高いところまでのぼっていったので、なんだかこわいような、しんぱいなような氣がしてきました。おひめさまは、レオンが小さい点になってかすんでしまったあたりをじっと見て、考えこんでしまいました。……子供というものは、ことに男の子は、ぼうけんがすきで、やりたいといい出したことを、むりにやめさせたら、泣いてしまうにきまっている。けれど、もし、レオンが空からおりてくるときのことばをわすれてしまって、このまま犬の背中にまたがって、何千メートルも高い空につれてゆかれたら、さぞ私のことをむごい人だとうらむだろう。もし、また死ぬようなことがあったら、どうしよう。そのときの、レオンのおかあさんのなげきが思いやられる。……

おひめさまが、こんなしんぱいをしているあいだに、レオンは、ずんずん高くとんでいました。そのうちに、地面が、ぼんやりとしか見えないほど高い空にのぼったので、パリの町は、まるでお皿の上に、小石をいっぱいのせたように、小さく小さく見えるのでした。アンバリードのお堂の屋根のとがったところが、メリケン針の金色の頭ぐらいに光って見えます。

空氣がたいへんつめたくなってきたので、のぼってきた高さがわかって、着物のうすいのがしんぱいになりました。レオンは、もうそろそろおりようと思いました。そこで、なんどもおけいこをしておいた、まほうのことばをとなえようとしましたが、うっかりまちがえていってしまいました。おりるときのことばと、とび立つときのことばを、ごちゃまぜにして、あべこべにとぶときのことばを、二度さけんでしまいました。

ナスゲッツ
ナスゲッツ

ところが犬は、いっこうおりそうなようすもなくて、かえって早さをまして、もっと上の方へどんどんのぼっていきました。レオンは、氣が氣でありません。まほうのことばをとりちがえたことに氣づいて、いそいでもうひとつのことばを思い出していおうとしましたが、うろおぼえになってしまって、でたらめなことをさけんだので、犬は、ますます高くとびあがっていくのです。なにしろ、おりるときのことばは、むずかしすぎました。レオンは、まほうつかいのむすこではないのですから、いっぺんにうまくおぼえられなかったのも、むりはありません。レオンは、「アルダボロ」といわなければならないところを、「アイドン」「ブウロウ」「アダダブロ」、あるいは「オボブウロ」「アッタンボロ」そのほかにたような、すこしもまほうのことばにならないばかなことばを、十もならべ立てましたけれども、犬は知らんかおして、きらくそうにとんでいるばかりでした。

レオンは、空の散歩がこわくなりはじめました。――ぼくはこうして、一生、空のまんなかに、とまっていなければならないのかしら？　と、じぶんじしんにたずねかえしました。――おかあさんは、晩になっても、ぼくがかえってこないと、さぞしんぱいなさるだろうなあ。それに、ぼくは、何もたべないで、空の中に生きていられやしない。「たすけてくれ――」とどなったところで、だれにも、きこえるはずもなし、ああ、神さま!!　いったいぼくは、どうなるんでしょう。……

レオンは、ひょっとして、たすけてくれる人が、とおりはしないかと考えましたけれど、空の旅行者は、とてもすくなくて、よほどのめぐりあわせでもなければ、あうわけもありま

せん。そうして、空の中には、たぶん宿屋だってないでしょう。

まほうのことばをわすれたあわれな子供は、すてきな犬にのって、空をとぶというよろこびもかききえてしまって、どうすることもできないくるしさにお

おわれてしまいました。どこの小さい子供でも、おそろしいときにするように、とうとうレオンも、泣きだしてしまいました。

泣くだけ泣いてしまうと、レオンは、泣くにとは何にもならないと氣がつきました。空の中で泣いたって、だれもいないし、なぐさめてくれるものだって一人もいないのですから。それよりも、しんぼうづよく、あのまほうのことばを思い出して、すこしもはやく地面の上におりねばならないと、勇氣をふるいおこしました。そこでレオンは、その小さな頭を、先生や博士の頭にまけないようにはたらかせました。

——たった二時間まえに、ぼくは、このことばを知っていた。そのときは、大していりもしなかったが、今は、命をたすけるために、どうしても、それを思い出さなければならない。さあさあいつしょうけんめいにさがしてみよう。

アラポロ
アラブレロ
アルマボロ
アルダブロ

ああ、だんだん近よってきたぞ。——これなら思い出せそうだ！

レオンは、高い声で、十五分間も、こんなことばをならべておりました。もしひょっとして、だれかが、ここをとおりかかって、このばかなことばを聞いたとしたらどうでしょう。この小さなお人よしが、空の中で、ひとりで、みょうなことばをしゃべっているのですもの、ずいぶんおかしなものでしょう。

いっしょうけんめい頭の中をさがしまわっているうちに、とうとうおしまいに、まほうのことばを思い出すことにせいこうしました。

アルダボロ!!!

むねをドキドキさせながら、とくいになって、大きな声で、三度さけびました。このそこ知れないあぶなかしさから、みごとにぬけ出すことができたのですもの。レオンはおおいばりでした。

七なまえ

レオンが、三度まほうのことばをさけぶがはやいか、とび犬が、信じられないほどすなおに命令をきいたのを見て、レオンのよろこびはどんなだったでしょう。犬は耳をピンと

立てて、大急行で地上におりはじめました。レオンは、しっかりと背中にしがみついて、しずかにその羽をなでてやりました。

まもなく、地上のいろいろなものが見えはじめました。どんなにレオンはうれしかったでしょう。パリの町はもう、小さいお皿の中の石ころみたいではなくなりました。家家が、お茶わんの大きさぐらいに見えてきました。そうして、しげった並木のぎょうれつも見えてきました。点のようだったバンドーム廣場の円柱が、だんだん柱に見えてきて、ノートルダム（パリの有名なお寺）の塔は、二つの黒いかたまりのように見えます。セーヌ河は、まるで黄ろいリボンがうねっているようです。

やがて、おひめさまのお城のはなれ家も見わけがついて、白いうすものをきたおひめさまじしんが、芝ふの上で、しきりにあいずをしていらっしゃるのがわかりました。さっきから、氣をもんで見ていたおひめさまが、レオンのおりてくるのを見て、安心して、すこしずつ腕をおろしているのまでわかりました。レオンがあんまり長く空にいたままかえってこなかったので、このおひめさまのしんぱいは、たいへんなものだったのでした。

とび犬は、うつくしい主人をよくおぼえていて、おひめさまの足もとへおりてきて、うずくまりました。そのとき、レオンは、はげしい目まいをかんじながら、むちゅうになって、地面へ足をつけました。

「ぼく、とうとう、かえってきました。」

と、レオンは、息をきらしてさけびました。

「空からおりてこようと思ったとき、うっかりまほうのことばをわすれてしまって、ずいぶんまごつきました。もうおひめさまやおかあさんにあえないかと思いました。だけど今では、もう、いつでも、はっきりと思い出せます。」

「おまえは、ほんとにゆうかんな子ね。……でもずいぶんしんぱいしましたよ。」

と、おひめさまは、レオンのからだをやさしくかかえながらいいました。

「これでおまえは、すてきなものをもっているだけのねうちがあるということがわかりました。……けれど、たいへんおそくなりましたから、はやく、おかあさまのおうちへ、おかえりなさい。どうしたのかと思って、おかあさまが、待ちくたびれていらっしゃるでしょう。……さあさあ。」

レオンはおとなしくうなづいて、しかし、まだのこりおしそうに、

「そしてぼくの犬は？　ぼくは、このとび犬をつれていってはいけませんか？」
「あら、おまえは、まだこの犬にみれんがあるの。あんなあぶない目にあったのに。」
「ええ、ちっとも。ぼく、もう今では、ちっともしんぱいしません。なぜって、もうちゃんと、まほうのことばをおぼえこんでしまいましたもの。さあ、こいこい。」
レオンは、とび犬に近よって、ひきよせながらこたえました。それから立ちどまって、おひめさまにたずねました。
「ぼく、これの名を知らないんですけれど、……あなたは、いつも、なんておよびになりますか？」
「ここでは、かんたんに、『とび犬』っていうんですよ。けれども何かほかの名をつけなければいけませんね。なぜって？　ぼうや、おまえのこのつばさのある犬は、世の中のだれにもかくしておかなければいけないのよ。おまえが、これといっしょにとぶのは、きっと夜でなければいけませんよ。それでなかったら、ここのお庭にいらっしゃい。ここなら、だれも、おまえを見つけることができませんから。」
「どうしてなの？　ぼく、これを、おかあさんに、いうこともいけないの？」
「おかあさまにでも、だれにでも。」

「アンリにも、話しちゃいけないんですか？」
レオンは、つまらなそうにいいました。
「アンリって、だれなの？」
「ぼくの学校のお友だちなの。アンリは十三で、ぼくより大きいんです。おじさんが、アンリにてっぽうを……」
「わかりました。だけど、どうして、アンリに、おまえの犬のことを話きなければならないんですか？」
「それはね、ぼくに、しょっちゅう、てっぽうの話をしているのよ。アンリは、てっぽうといっしょに、ぼくのおかあさんとこで、いつも夏休みをすごすのです。それでアンリは、いつでも、ぼくをからかうのです。かりにゆくには、ぼくはまだ小さすぎるって……アンリは大きいんです。ネクタイももつているし、長ぐつももっているし……」
「そう。けれどもアンリは、とぶ犬をもってませんねえ。」
と、おひめさまはいたずらそうに笑いながらいいました。
「もしおまえの犬を、おまえがつれていって、やさしくかわいがって、うまくおしえこんでやれば、世界中のてっぽううちより上手に、山鳥やきじをとってきますよ。」

「ほんとうですねえ。……アンリのやつ、さぞくやしがるだろうなあ。じっさいゆかいだなあ。」

と、レオンは大よろこびで、かけ出そうとしました。

「氣をつけるんですよレオン、なんでもちょっとした軽はずみが、たいへんなことになるものよ。もし、おまえの犬に羽ねがはえていることを人に見つけられたら、おまえは、それをなくしてしまわなければなりませんよ。」

「なぜでしょう？　だれかが、これをぬすむんですか？」

「それだけですめば、まだふしあわせもはんぶんですむというものよ。おまえがよくよくさがせば、さがし出すこともできるでしょう。お金をたくさん出せば、買いもどすこともできるでしょう。そんなことは、しんぱいするほどのこともありません。だけどぼうや、助けることもできないふしあわせということがあるものよ。私がおしえることをしっかりきいておぼえていてちょうだい。」

八　おひめさまのおしえ

「いまの世の中ではね、なんでもよくしらべたり、考えたり、いいあったりします。こういうことは、世の中がだんだんよくなったり、わるい病氣をなおしたりするのに役立つものです。そういうおしごとをしている人のことを、科学者というんですよ。

その人たちにしらべられるかわいそうな動物たちは、みんなからだをきりひらかれて、すっかりばらばらにされるのです。それを学者は、『かいぼう』というのです。

それだからぼうや、おまえの犬も、つばさがあることを人に知られたら、かたわだというので、すぐさまきりひらかれてしまうでしょうよ。

そのつばさが、どうして動くのかを知るためには、きっとつばさを切って見るでしょう。とびながら、どうしていきができるかを知るためには、むねを切りひらいて見るでしょう。そのひとみが、どうして太陽のつよい光にたえられるかということも、むろんしらべてみるでしょう。それがかいぼうですよ。」

レオンには、このお話が、すこしもわかりませんでしたけれども、とにかくすばらしい犬だというので、もし人にとられたらたいへんだと、しんぱいでなりませんでした。それで、この大きなひみつを、だれにもしゃべらず、さとられぬようにすることを、かたくおひめさまにやくそくしました。

「さあ、そこで、この犬に、なんという名をつけましょうね。」
と、おひめさまがいいました。
レオンは、すこし知ったかぶりのところがある子でしたから、二三日まえによんだ、神話の中の詩にあった、馬の名をいいたくなりました。それは、つばさのはえている空とぶ馬の名でした。
「ペガサスという名は、どうでしょう？」
「まあ、ばかばかしい。いま、私がいったじゃありませんか、人に知られてはならないことを！　ペガサスなんて名をつけたら、いっぺんで、つばさのある犬だということがわかってしまいますよ。」
「それじゃぼく、ゼフィール（西風の神）にしましょう。」
「またですか。」
と、おひめさまが、まゆをしかめていいました。
「おまえは、なんてばかなんでしょう。……めずらしい形をしていることをかくすために、できるだけありふれた名をつけなければならないということが、どうしておまえにはわからないの？」

「ああ、ぼく、わかった。ぼくの犬はとべるのだから、かるいでしょう？　だからバトウ（足のみじかい身がるなりょう犬）という名にしましょう。」
「だめだめ！　それじゃ、やっぱり、なんにもなりませんよ。かしこい人なら、まるっきりあべこべの名をつけるでしょう。おまえの犬のために、まったくありふれた名をえらんでください。たとえば、アゾール、カストール、メドール。」
「おお、いやだ！」
レオンは、ふくれ面していいました。
「おかあさんとこの、門番のおかみさんが、犬を三びきもってるけれど、その名とおなじですよ。」
「では、ファロー、タッカン、スボガ、どれでもおまえのすきなのになさい。」
「ファロー、ぼく、ファローがすきだなあ。だけど、タッカンのほうがもっときれいですね。スボガもいいなあ。いや、ファローのほうがまだいいかもしれない。ファロー、ファロー、だけどあんまりありふれていますね。ぼくスボガのほうが……」
「おやおや、またおまえのうつりぎがはじまりましたね。子供のうつりぎほどうるさいものはないのよ。レオン、いつでもふたつのものをほしがっていないで、どれにするか、は

やくおきめなさい。」

レオンは、おひめさまのおっしゃるとおりだということが、よくわかりましたので、このあたらしい友だちにすぐ、ファローという名をつけました。それから、しんせつなおひめさまに、お礼をもうしあげて、とび犬をつれて、おかあさんのおうちへかえってきました。

九　ひみつ

レオンが、おうちについたとき、とてもうれしい氣持と、なんだかおもくるしい氣持とが、いりまじっていました。あんまりふしぎなものをもっているのは、たいへん心がかりなものです。

おかあさんは、レオンを見ると、かけよってほおずりしていいました。

「ぼうや！　やっとかえってきたのねえ。あんまりおそいので、おかあさんは、とてもしんぱいしていたのよ。おもしろかった？　今まで、おひめさまのところで、何をしていたの？」

おかあさんにきかれて、レオンはこまってしまいました。なぜって、しょうじきにいうのはむずかしいことでしたから。

「ぼく、お食事したの。」

「それから？」

「ぼく、お紅茶とコーヒーをのんだの。」

「朝の九時から、晩の五時まで!!　まあおまえ、二十ぱいものんだんじゃないの？」

と、おかあさんは、笑いながらおっしゃいました。

「いいえ、ぼく、そんなに長くお食事していやしないのよ。……ぼくたち、温室やお庭を散歩したのよ。それから、あそんだり、かけたり……」

「なんですか、このきたならしい犬は？」

おかあさんは、とうとうとび犬に氣がついて、びっくりしておたずねになりました。

「これが、おひめさまのごほうびなの？　なんてみっともない犬でしょう。バランクールのおひめさまは、おまえをからかったのね。

レオンは、この犬のふしぎなことを、人にいってはいけないといわれているので、くやしかったけれど、しゃべるのをがまんしました。けれど、おかあさんが、このすばらしい

犬のことを、あんまりばかにしたようにいうので、しゃくにさわって、ほんのすこしだけいいました。

「もしおかあさんが、この犬の……かけるのをごらんになったら。」

とぶということがいえないので、つらいので

す。

「ああ、ほんとにおかあさんが、ぼくみたいに、この犬を見ることができたらなあ。こいつは、とてもりこうで、めずらしい犬なんだけどなあ。」

「ご安心なさい。私はべつに、この犬からかわったすばらしいところをさがしたいとは思わないのよ。私もう、この犬、たくさんよ。」

おかあさんは、何も知らずに、犬のかなしそうな顔を見て、笑っておりました。

レオンは、ざんねんでたまりませんでした。このみっともない犬が、大したねうちのあることを、しゃべれないばかりに、ばかにされているのを、だまって見ていなければならないのがつらいのです。地面よりずっと高いところで、育てられ、世界中のにんげんよりも、高い空の上を、じゆうにとべるこの犬を、ばかにされることは、まったくがまんができません。

「おいで、ぼくのファロー！」ファロー

と、とび犬のそばへよって、レオンは、やさしくいいました。

「ぼくのおへやへおいで。あそこなら、だれもおまえのことを、ばかにしないからね。」

「おまえのおへやですって？」

おかあさんが、びっくりしておっしゃいました。

「いけませんよ、ほんとに。馬小屋へでもつれてゆきなさい。」

「馬小屋ですって！」

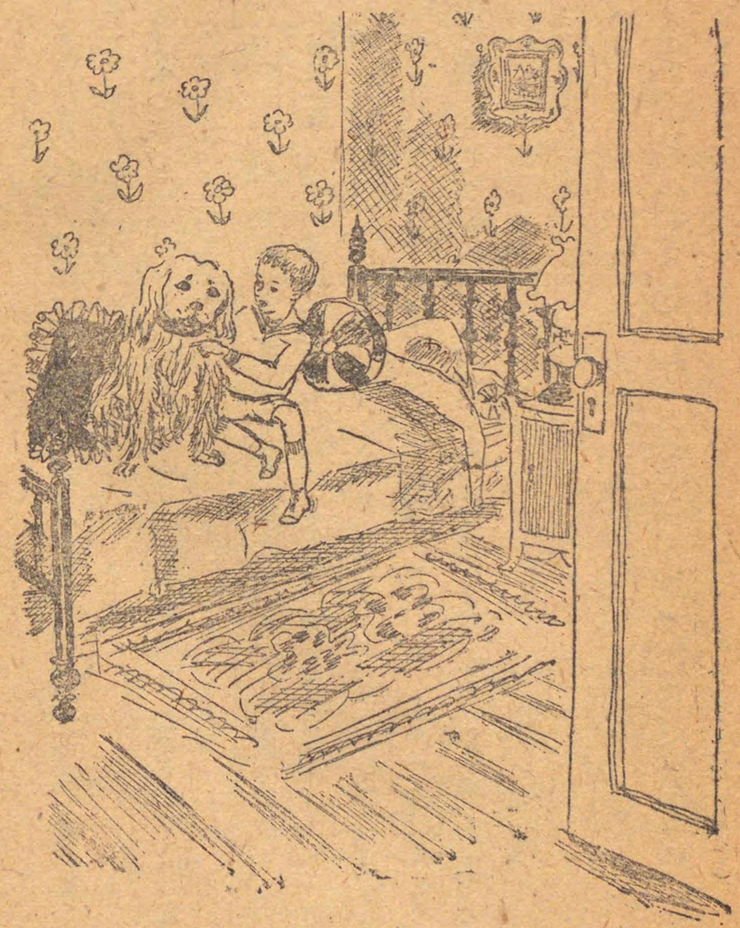
レオンは、ふんがいしていいかえしました。

「馬小屋へいれるんだって？　こんな！」

と、いいかけて、はっとして、口をおさえてしまいましたが、くやしいやら、しんぱいやらで、つい、なみだぐんでしまいました。

「おやおや、ぼうや、泣かないでもいいのよ。それでは、おまえのおへやにつれていらっしゃい。おまえがそうしたいのなら、それでもいいのよ。そうして、お食事をしに、はやく出ていらっしゃい。もうだいぶおそいのよ。」

レオンは、このことばになぐさめられて、ファローをおへやにつれていって、やわらかいクッションの上に、そっとおきました。それからお食事をするために、おかあさんのところにもどってきました。



十　かわいいもの

レオンは、空き中の散歩で、へとへとになっておなかがすいていたので、とてもよくたべました。でもお食事のあいだじゅう、ずっとあることを考えて氣になってたまりませんでした。

「ぼくの犬に、なにをたべさせたらいいのかなぁ！　おひめさまに、おきき するのをうっかりわすれちゃった。……鳥みたいにすりえをやるのかしら？　犬みたいに骨をかませるのかしら？　もし今、あれをここにつれてこられたら、パンをたべるかどうか、すぐためしてみることができるんだけど……

　そのとき、家の中で、きゅうにドタンバタン大きな音がして、めしつかいたちが、大さわぎをはじめました。

「こんちくしょう！　どろぼう！　あっちへゆけ！　ずるいやつめ!!」などと、口ぎたなくののしる声がきこえます。おかあさんは、ベルを鳴らして、どうしてそんなにさわぐのかとおききになりました。

「おくさま、お料理番がさわいでいるのでございます。レオンさまの犬が、牛肉のカツレツを、二枚ぬすみましたのです。」

と、めしつかいがいいました。

「おお、よかった！　犬のすきなもの、ぼく、わかった。ぼく、……」

と、レオンがいいかけたとき、おかあさんが、

「おやおや、私がいったとおりでしょう。でも、こんどだけは、かんべんしてあげましょ

う。」
と、笑いながらいいました。

レオンは、アンリたちの遊びにくるはずの秋がくるのが、とても待ちどおしくてなりませんでした。そうして、それまでのあいだ、まいにち、空の散歩をするために、おひめさまのお城の庭に出かけていきました。

その道で、みんながからかいます。

「なんてきたない犬だらう！　これよりもっとみっともない動物を見たことがないや。」

すると、ほかのひとりが、

「こいつよりは、ちんのほうが、よっぽどましだよ。」

と、けなすのでした。

レオンは、こんなにばかにされて、おひめさまのお城につくのですが、犬のせなかにのって、空中をとんでいると、こんなつまらないわる口など、みんなわすれてしまいます。

日がたつにつれて、レオンは、とび犬を見なれてきたので、このたいせつなたからものを、まえほどめずらしく思わなくなりましたが、はんたいに犬のほうでは、小さいご主人

によくなついて、よくいうことをきくかわいいけらいになりました。

十一、お友だち

レオンは、わかいお友だちのアンリが、やってくるのを待っていました。アンリのじまんのてっぽうは、おじさんの荷物といっしょに、もう先についていました。

アンリから、もうじきたずねていくという手紙をもらって、レオンは、アンリをびっくりさせてやろうと思うと、うれしくてたまりませんでした。

「アンリは、ぼくのすてきな犬を見て、なんというだろうな。きっとわる口をいってからかうだろう。」

なにもしらないお友だちは、レオンが思っているほど、この犬がいいものだとは、けっして思わないでしょうから。

レオンのおかあさんは、ファローをすいてはいませんでしたが、レオンがとてもかわいがっているので、ファローをよろこばせるために、ときどきビスケットを買ってきてくださったりしました。よいおかあさんというものは、みんなそうしたものです。

アンリがやってきたとき、ファローは、まず自分のてっぽうのことをじまんして、それから犬を見ていいました。

「ねえきみ、ぼくがりょうに行くとき、このいやな犬をかしてくれるだろう。」

「いやだよ。きみは、てっぽうをうつことが、そんなにうまくないから、もしまちがえて、あの犬をうたれたらこまるからね。まっぴらごめんだよ。」

「なんだい！　こんなみっともない犬のことなんか、そんなにしんぱいするもんじゃないよ。」

そうして、アンリは、朝から晩まで、とび犬をからかっておりました。大事な犬を、いじめたりくるしめたりしてよろこんでいるアンリを見て、レオンは、腹が立ちました。けれど、じっとがまんづよくしんぼうしました。

アンリは、毎朝かりに出かけていきます。そうして夕方には、一ぴきのえものもなくて、つまらなそうな顔をしてもどってきます。ところが、レオンはあべこべに、まい晩きじや山鳥をさげて、にこにこしてかえってきます。

レオンは森の中で、だれもこれまで足をふみいれたことのない場所を見つけたのです。そこは沼池で、とてもふかいいばらのやぶにまもられていて、どの方角からも、なかなか

近よることができないのです。この沼池は、たくさんの鳥のかくれ場所で、高い木のしげみにかくされていましたが、レオンは、とび犬のつばさにのり、いばらのやぶや高いがけをとびこえることができたのでした。

ファローは、鳥よりもずっとはやくとぶので、鳥どもはみんな追ひつめられて、動けなくなってしまうのです。犬は、口で鳥をくわえると、頭をレオンのほうにまわして、つかまえたえものをさしだすのです。

レオンのかりが大成功なので、アンリはたいへんやきもちをやきました。レオンは、どうして鳥をとってくるのか、けっして話さないのですけれど、どうやらアンリが感づいたらしいので、ちっともゆだんをしませんでした。アンリは、レオンのもってかえるえものに、てっぽうで打ったあとがないのに氣がついたので、ファローをうたがいはじめました。

レオンはレオンで、ひみつをもつようになってから、すっかり性質がかわってきました。ファローのふしぎなひみつをかくすために、あれこれと頭をつかうので、十も年をとったように、しっかりしてきました。

だれだって、おかあさんは大好きでしょうが、レオンはことに、おかあきんがすきでした。その大好きなおかあさんが、病氣になったとき、このお医者さまを信用しないので、みてもらうことができずにこまってしまいました。そこで、ある晩、レオンは、六十キロもはなれているパリまで行って、お医者さまをたのんできました。

子供のおかげで、すぐ病氣がなおったので、おかあさんは、とてもよろこびました。人のよいおかあさんは、レオンが、パリまでてくてくあるいて行ってきたと思っているのですが、みなさんはとび犬のことを知っていらっしゃるから、レオンが、パリへの道を、足であるいて行ったのではないことを、よくおわかりでしょう。

しかし、となり近所の人たちは、おかあさんとおなじように、何も知らないので、この小さい男の子が、六十キロの夜道を、行きに三十キロ、かえりに三十キロ、おとなもおよばぬはやさであるいたといって、よるとさわると、感心して話しあいました。

ある日、おかあさんがおっしゃいました。

「おとうさまが、もうじきおかえりになるのよ。レオン！　うれしいでしょう？　ツーロン（フランスの南にある港）から、お手紙くださってね、十五日くらいたてば、ここへおつきになるそうですよ。」

レオンは、大よろこびでした。三年も、おとうさまがおるすだったのですもの、お日にかかるのが、どんなに待ちどおしいか知れません。そうして、こんな話をきくと、ツーロンの港に、そんなにいく日もとまっていらっしゃるおとうさんを、ここでぼんやり待っているのがじれったくて、がまんできませんでした。

これは、とび犬といっしょに旅行をするのに、とてもよいときだと、レオンは思い立ちました。そこでレオンは、おひめさまのお城へかけつけました。

「おとうさんが、ツーロンにおつきになったんです。」

レオンはおひめさまにいいました。

「ぼく、待ちどおしいので、ちょっとでも、おとうさんのそばへいってみたいのですけれど、この旅行は、たいへん時間がかかります。そこで、おねがいがあるのですが、どうぞ、このお城に、あなたのおそばに、いく日かおいておきたいと、おかあさんにおっしゃってくださいませんか。ぼくはただ、そっと、おとうさんを見たいばかりなのです。おとうさんのそばへかけよったり、話しかけたりなんかしません。とび犬のひみつだけは、きっとまもります。」

バランクールのおひめさまは、レオンのいっしょうけんめいなねがいに心をうたれて、

こころよく、おかあさんに、手紙を書きました。

——今、家に、おいが、あそびにきておりますので、レオンを三四日とまりがけでおよこしください。——

この手紙を見て、おかあさんは、レオンがお城にとまりにいくことをおゆるしになりました。

レオンは、たいそうよろこんで、その夜のうちに、とび犬にのって、ツーロン目ざして出かけました。

ツーロンへの道すじは、それが、空の旅であっても、たいへん長いと思われました。あくる朝は、食事をするためと、かわいい犬を休ませるために、リオン（パリとツーロンのなかほどにある都）におりて、そこで、一日くらしました。

ファローは、お芝居のえらい役者によくにています。上手な役者は、びんぼう人にも、お金持にも、大臣にも、そっくりそのままなります。また、朝の大通をどろだらけの木ぐつをはいてしょぼしょぼとあるく人にもなります。

ファローは、ちょうどこの上手な役者のようで、ひるまはどろの道をよごれてあるいている人のようですが、夜になると、王さまのように雲の中をとびます。ただ、ざんねんな

、ことには、それを、みんなに見せることができないのです。

レオンは三日目の晩に、ツーロンにつきました。レオンは、いつも、人にみつけられないように、まだ夜のあけきらないうちに、地の上へおりているようにしていましたから。おなじ町にいて、おとうさんにみつからないようにするには、とても用心ぶかくしなければならないことを、レオンはよく知っておりますから、うまくいっても、窓ごしに声をきくだけで、まんぞくしなければならないかもしれません。

夜になったので、レオンは、ファローといっしょにとんでいって、おとうさんのとまっていらっしゃる、お部屋の窓のところまで、いこうとくわだてました。

ツーロンは、あたたかい土地なので、どの家の窓もたいていあけはなしにしてありますから、声をきくこともできますし、お部屋のなかで、何をしているかもよく見えるのです。ちょうどレオンが、おとうさんのお部屋の窓のところへきたとき、おとうさんのなつかしい声がきこえていました。おとうさんは、いっしょに旅行しているお友だちに、レオンのことを話しているところでしたので、窓の下にしのびこんでいたレオンは、自分の不作法さをはずかしく思わずにいられませんでした。

「八日たったら、私はここを出て、かわいいむすこにあうことができます。」

と、レオンのおとうさんはおっしゃいました。

「レオンは、すっかり大きくなって、ずいぶんかわったそうです。母おやが手紙で知らせてきたのですがね。とてもきれいになって、まるで天使のようだなんて、書いてありましたっけ。しっかりして、よい氣だてになってきたそうです。

私は、レオンをぜひ私のように、船のりにさせたいと思っておりますけれど、しかし、レオンが、なりたいと思わないなら、なんでも、あれのよいと思うしごとをえらばせようと思っております。」

自分のことを、こんなにじまんされるのを聞いて、レオンはつい笑ってしまいました。けれど、自分のことをこんなによく氣をつかってくださるのは、ほんとうにありがたい、きっと世の中のお役に立つ人になりますと心にかたくちかいました。

せまい窓のそばを横ぎるおとうさんの顔が、ちらりと見えました。レオンは、なつかしさで、むねがいっぱいになって、われ知らず、「おとうさん！」とよびかけそうになりましたが、おひめさまが心配して待っていてくださることを思い出すと、ハッとして、出かかつた声をおさえました。そしておとうさんの横顔と元氣なお声を聞いたのを、なによりの

おみやげにして、その晩のうちに、パリへむかってとび立ちました。

たった三日間のおるすだったのですけれど、おかあさんは、レオンがまるで一年間もいなかったように待ちこがれてむかえてくださいました。しかし、アンリは、いじわるそうにレオンを見ていいました。

「きみ、どこからかえってきたんだい？」

「ぼく、バランクールのおひめさまのお城からかえってきたんだよ。

と、レオンは、なにげなくいいました。

「ぼくも、そうだと思ったよ。だけどきみは、ずっとあそこにいたわけじゃないんだろう？　このあいだ、あそこのおひめさまのお庭に散歩にいったんだ。そのとき、お城の番人にきいたら、きみはお城にいないっていっていたよ。」

「あの人は、あそこに、とまっているわけじゃないもの。知っているはずがないよ。」

と、レオンはいらいらしてこたえました。

上手にうそをついて、もっともらしく見せかけるということを知らないレオンは、さっさと、アンリのそばをはなれて、お友だちのいじわるさに心を苦しめられ、なやみなが

ら、自分のお部屋にはいってしまいました。

レオンは、自分をふしあわせにするようないやなお友だちが、お休みがおわってはやくひきあげていってくれるのを、じっとがまんしていました。アンリが、いつまでもここにいなかったら、とび犬も、きっとだいじょうぶでしょう。

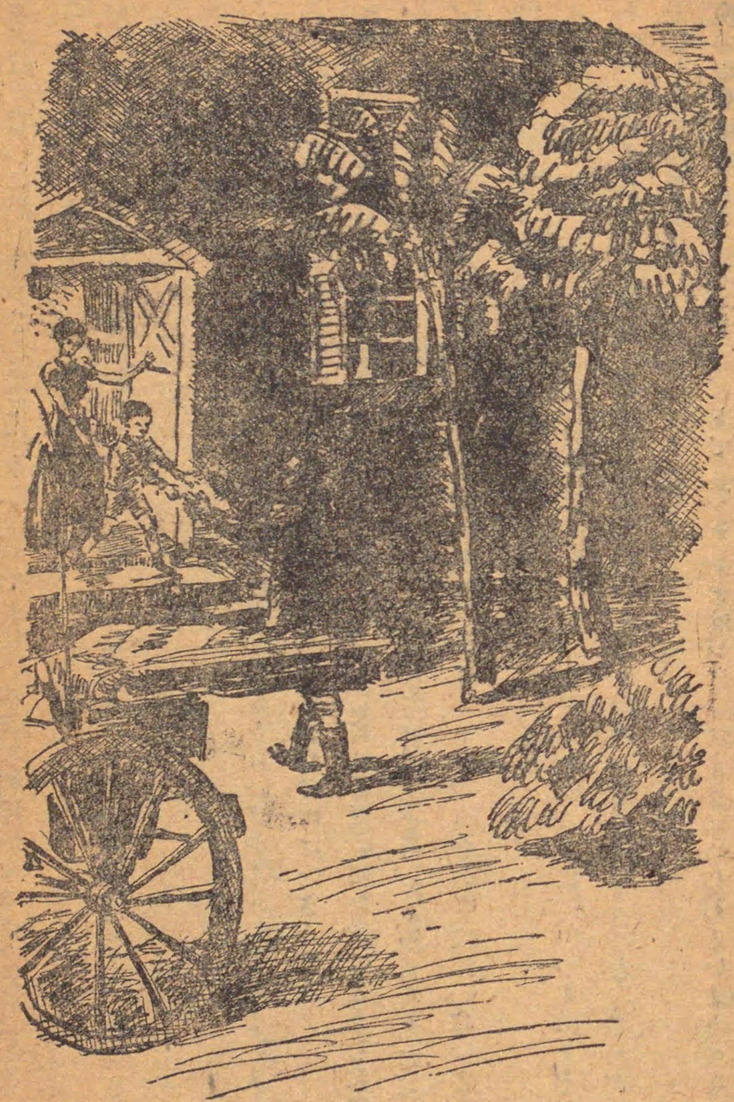
そのうちに、おとうさんのおかえりになる日がだんだん近づきました。ある晩、レオンは、また、おとうさんのそばへいってみたくなりました。月の光で、とび犬を、人に見られてはならないので、くらい道まで、犬をひき出してから、まほうのことばをとなえてとびあがりました。とたんに、

ナスゲッツ

ナスゲッツ

と、だれかが、さけぶ声がしました。レオンは、やまびこかと、ふしぎに思いました。けれど、なんにしても、べんなこともあればあるものだと、むねが、ドキドキしました。

月夜の空を、矢のようにとびながら、下のほうを見おろすと、おとうさんの馬車らしいのが、大通をかけてくるのを見つけました。だんだんひくくおりていって、よく見ると、



月の光にてらされて、馬車の中にすわっている、おとうんが、はっきりわかったので、レオンは大よろこびでした。そこで、つぎの駅まで、馬車とおなじくらいのはやさで、いっしょにかけて行きました。

つぎの駅につくと、ぎょしゃは、馬をつけかえて、すぐ出発しましたので、レオンも、休むひまなくおなじように空の中をはしって、とうとうお家へつくまで、おとうさんについてきてしまいました。馬車が中庭にはいるあいだに、レオンは、そっととび犬からおりて、おとうさんのところへかけよって、とびついてよろこびました。

「おかえりなさい。おとうさん！　ぼく、どうしても、おとうさんが、今晩おつきになるような氣持がして、ねむれないので、おきていました。」

「やあ、レオン！　元氣だったかい。」

おとうさんが、うれしそうにむすこをだいていいました。

「まったくあたしも、あしたの朝でなくてはつかないと思っていましたよ。私が三年いなかったあいだに、フランスも、ずいぶんかわったものだとびっくりしましたよ。このごろの駅馬車は、とても早くなっていいね。」

レオンは、おとうさんにお目にかかって、お話したり、だいていただいたりして、とて

もしあわせでしたが、何かことばにいうことのできない不安な氣持がするのをはらいのけることができませんでした。

それは、おとうさまとお庭を散歩していた時、また、さっきとおなじあの声で、

ナスゲッツ
ナスゲッツ

と、はっきりよぶ声がきこえたので、レオンはとびあがるくらいびっくりしてしまいました。ああ、こんどは、どうしたって、やまびこだなどと思うわけにはいきません。

レオンが、まっさおになったので、おとうさんは、ふしぎにお思いになってどうしたのかとおたずねになりました。けれども、かわいそうなレオンは、すっかりむちゅうになってしまって、おとうさんに返事をするのもわすれ、ファローが、自分のそばにいないことを知ると、あわてて自分のお部屋にかけつけました。

ファローは、ちゃんとレオンのお部屋のやわらかいクッションの上に、いつものようにねそべっていました。しかし、あの自分のでないまほうの声を思い出すと、むなさわぎがしてなりませんでした。

晩のお食事のとき、アンリは、とてもレオンをばかにしたようないじわるいようすをし

てみせて、あてこすりをいうのをやめませんでした。レオンのおとうさんが、旅行のお話をなさったときも、アンリは横から口をはさんで、にくらしそうにいいました。

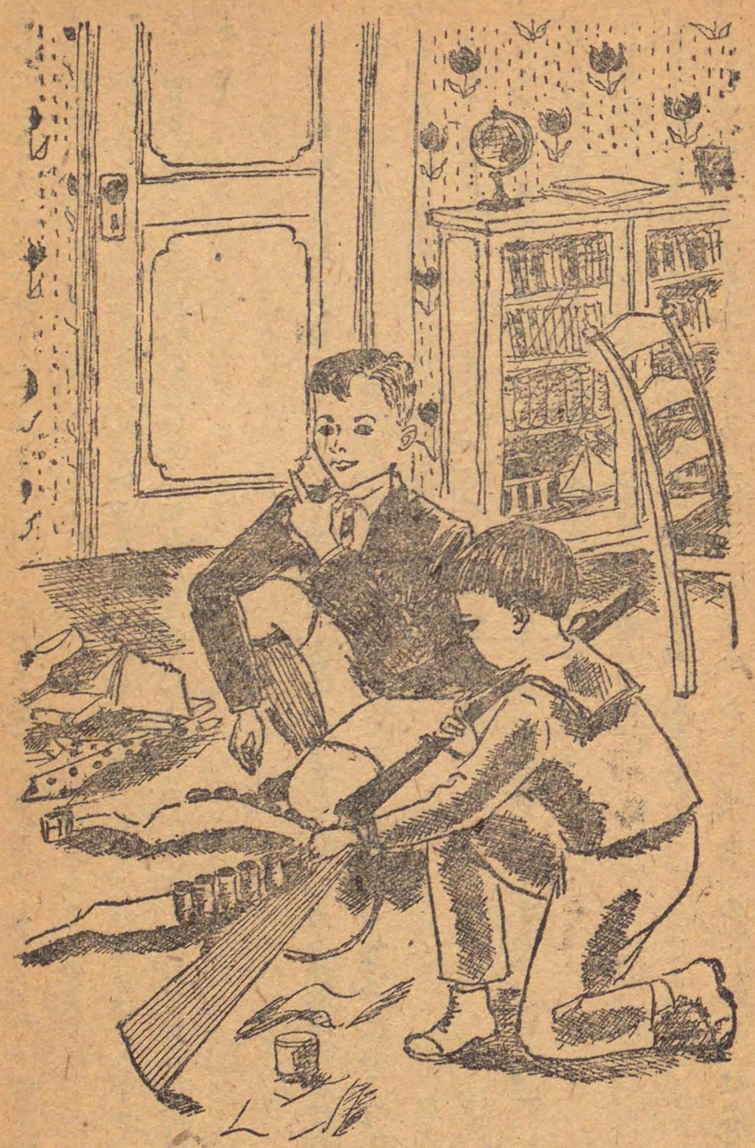
「レオンもやっぱり、旅行が大好きですね。けれども、海の上の旅行じゃないんです。……」

と、しゃべりかけて、つきさすような目つきでじっとレオンを見ました。

「地面の上のことでしょう？」

レオンはさけびました。レオンは、アンリのにくらしい笑いをがまんすることができませんでした。そうして、アンリがもうはっきりと、自分のひみつを見やぶっていることを知りました。

レオンは、氣持のわるいおちつかない夜をすごしました。レオンは、自分のお部屋にいつまでも起きていて、ファローをなでたり、話しかけたりしながら、犬のそばからはなれないようにしていました。ゆだんしていると、あのいじのわるいアンリに、いつとび犬をとられてしまうかもわかりません。だれだって、レオンが、とび犬をかわいがっているようすを見たならば、これいじょうレオンをくるしめたり、じゃましようとは思わないでしょう。



十二　空のむこうへ

そのうちに、アンリのおじさんは、かえり支度の話をはじめました。その日は、九月二十八日でしたが、きちょうめんなおじさんは、十月一日に、パリへかえることにきめてあるのです。

レオンはこのおじさんのきちょうめんさを、すこしもばかにしないで、だれよりもうやまっておりましたけれど、このきちょうめんな人が、三日だけ早くかえってくれないことを、このときだけは、ざんねんに思いました。

「もしあの人たちが、かえったら、ぼくも安心だし、ファローも助かるだろう。アンリが学校へかえってしまえば、とうぶんあうこともなくなるけれど、ぼくは、ちっともおしくないや。あれは、ぼくのほんとうの友だちじゃない。あんまりいじわるくされたもの。アンリは、ぼくをすきじゃないんだ。友だちには、まごころでつきあわなくてはだめだ。あ、ほんとうにはやくかえってくれるといいがなあ。」

あくる日、アンリは、荷作りをはじめましたので、レオンも、おどうさんが、散歩にさ

そいにくるまで、てっぽうのそうじを、ねっしんに手つだいました。まるで、てっぽうのそうじを、はやくしてやれば、一日でもはやく、アンリが出立でもするかのように。

それからレオンは、おとうさんといっしょに、おうちを出ました。レオンは、まずファローをさがして、まちがいのないようにお部屋の中にとじこめてかぎをかけてから出かけました。

レオンが出かけたのを見すまして、アンリは、とび犬のとじこめてあるお部屋へかけつけました。とびらは、よく氣をつけてしめてありましたが、窓は開いていて、はしごなしでも、らくにお部屋の中にはいりこめるのでした。

アンリは、ファローのそばへいって、犬にいいました。

「おお、すてきなペガサスよ、ここへこい！　ぼくたちも散歩に行こうじゃないか。」

そういいながら、ファローを窓から外へなげだしました。

「おまえははねがあるから、足をこわすことはあるまい。」

そうして、犬の耳をひっぱりながら、庭へかけていきました。

「さあ、一まわりあそんでこよう。犬の王子さまよ、おまえは、ぼくのためにも、はたら

いてくれるだろうね。」

アンリは、犬の背にのって五六日まえ、やっとさがし出した、まほうのことばを、よくとおる声で、レオンのとおりにとなえました。かわいそうなファローは、仕方なくとび立ちましたが、いかにも、いやいやらしいようすでした。

アンリは、レオンより大きくて重いので、犬のとびあがりかたは、つりあいがとれないで、あらっぽかったので、アンリは、グラグラッとしました。あわてて、つばさにつかまろうとしましたが、いつも、レオンにかわいがられていることを思い出したファローは、とたんにつばさをゆすぶったので、アンリは、ドシンと落っこちてしまいました、

犬は、またあまり高くとばないうちでしたから、おっこちたアンリには、大したけがもありませんでしたが、ふしあわせなことにアンリは、だい二のまほうのことばを知らないので、ファローをとめることができません。ファローは、どんどん高く上ってゆくばかりで、どうしてもおりることができませんでした。もしこの時、レオンが、ここにいあわせたら、犬にきこえるやうに、（アルダボロ）をさけぶ時間は、十分あったのでした。

とび犬は、さしずするのり手がないので、どちらをむいていってよいのかわからず、空の中でまよってしまい、大きな雲の中にはいったので、骨までぬれてしまうような、あぶ

ない目にあってしまいました。
ファローは、こうしてあてもなく、フラフラした紙だこのように、でたらめにとんでいるうちに、太陽のしずむパリの西の空のほうへとんでいってしまいました。

レオンは、このできごとをすこしも知らないで、おとうさんといっしょに、散歩からかえってきました。そうして、レオンは、アンリが芝ふの上に平べったくなって落ちているのを見つけてかけよりました。アンリがたおれたまま、足をなでたり、うでをたたいたりしているようすを見て、だれかにつきとばされたのかと思いました。

「どうしたのきみ、だれがころばしたの？」

と、レオンはたずねました。

「にくらしいきみの犬さ！　あいつ、ぼくをのせてとびたくないものだから、ひどい目にあわせやがった！　しゃくにさわるちくしょうめ！」

アンリは、はらだたしげにいいました。

「なにっ」

と、レオンはびっくりしてさけびました。

「きみは、ファローをどうしたんだい？　ファローは、ぼくのお部屋に入れてしめていったはずだのに？」

「ああ、そうだよ。きみの部屋にいたよ。……まあ、あの高い空のほうを見てごらん。」

レオンはおどろいて、空を見あげました。

「空のずっと上のほうに、黒い点が見えるだろう、ひばりみたいにさ。」

アンリは、つづけていいました。

「ふん、あれが、きみの犬だよ。きみのにくらしいファローさ。きみは、かくしごとをしたね。あんなみょうちくりんな犬をもっていながら、知らんかおをしていてさ。とてもしんせつだよ。ぼくはね、きみのひみつをぶちこわしてやろうと思ったんだ。」

きのどくなレオンは、空の中のファローのすがたを追うのにむちゅうで、アンリの悪口も耳にはいりませんでした。空の上のほうに黒い点が見えているあいだはまだのぞみをもっておりましたが、やがてそれも、すっかり見えなくなってしまったので、ぼんやりとうなだれてしまいました。

やがてレオンは、氣をとりなおして、アンリを、とがめたりおこったりせずに、おうちへたすけてかえりました。そうしてお医者さんをよんで、みてもらうように、いろいろし

んせつにお世話しました。

それから、おとうさんやおかあさんのまえには、かなしみをかくして、バランクールのおひめさまのところへ出かけました。何かとび犬をつれもどすくふうがあったら、おしえていただきたいと思ったからです。

おひめさまは、レオンの顔を見るといいました。

「とうとう、しんぱいしていたようなことになってしまいましたねえ。かわいそうなレオンよ、こうなっては、どうすることもできないのよ。とび犬はね、つかれきって、つばさがうごかなくなってしまったときよりほかに、地面の上におりて來ることはできないのよ。そうしてどこにおりてくるか、だれにわかるでしょう。たぶん、中國かも知れないわね。ペルーかもしれないし、エジプトかコルコンドかもしれませんね。パリでないということだけはたしかよ。」

「パリ!! ああ、パリへおりてくれるといいなあ。そうしたらぼく、なんとかしてさがしだすことができるかもしれませんねえ。」

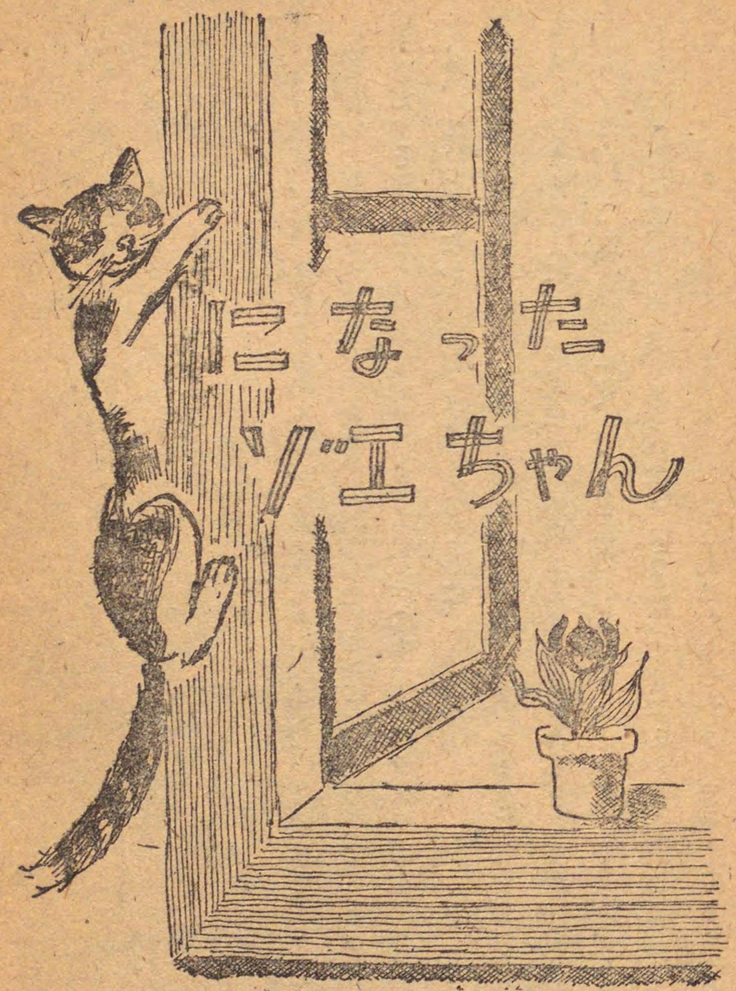
「ぼうや、おまえにあの犬をあげたときに、おしえたことをわすれましたか? もしおまえのかわいそうな犬がつばさをひろげたまま、パリでつかまえられたら、もうおしまいよ。

きっととび犬は、かいぼうされて、毛ひとすじのこらないまでしらべられるでしょう。だから、かえってだれも知らない野ばん人の島へでも落ちてくれたらいいのにねえ、それならまだ助かるのぞみがあるのですけれど。」

おひめさまのこうしたお話は、かわいそうな犬の運命について、すこしもレオンを安心させませんでした。そしてレオンは、おひめさまのもとへかけつけるまえよりも、もっとかなしくがっかりしてもどってきました。

レオンは何週間もがっかりしてお部屋にとじこもったままでしたので、おかあさんはたいそうしんぱいしましたが、しかし自分の子供が、なぜ犬を一ぴきなくしたくらいで、こんなにしょげているのか、レオンの犬がどんなにめずらしいものであるかを知らないおかあさんにはいっこうわかりませんでした。

アンリは、パリへかえってから、けがをなおして、おくれて学校へかえっていきましたが、レオンがもう空の散歩もできなくなって、まいばんおとうさんやおかあさんといっしょに、ストーブのまえで、たいくつそうにすごしていることを考えて、ひそかに心の中でよろこんでいました。

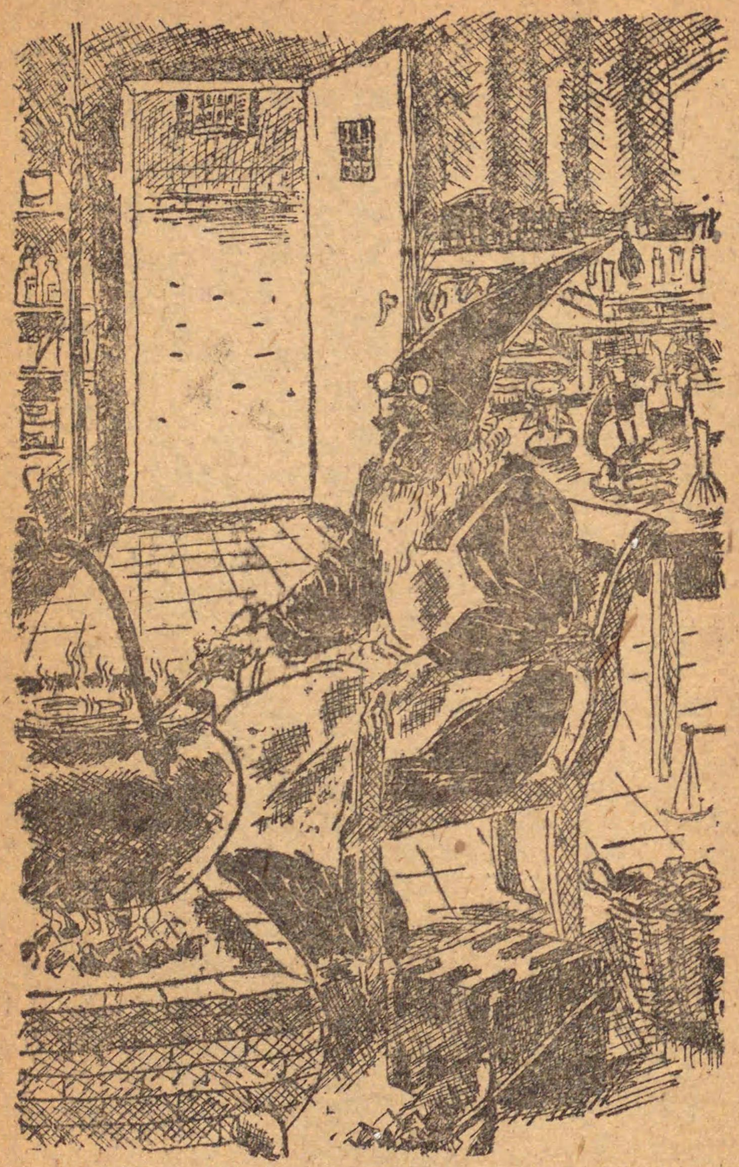


まいにち、新聞がくるとおとうさまがごらんになります。それからレオンに新聞をわたします。レオンは子供のページや、そのほか、とび犬のことの出ていそうな記事をさがして、すみからすみまで読むのです。

ある晩、レオンが新聞をうけとって、いつものように読みはじめましたが、とたんにハッとしていきがとまりそうになりました。その読みかけた新聞には、（科学院MG博士発表、奇怪な動物の組立てについて）と題して、次のような記事が出ていたのです。

——〇〇日、パリの空から一ぴきの動物がふってきた。それは犬の形をしていたが、背に羽ねがはえていて鳥のようでもあつた。つまり、首と足とあごは犬であるが、のうみそとむねとつばさは鳥である。同時に犬であり鳥であるこんなめずらしい動物は、いままでにかつて見なかつたものであり、知られもしなかつたもので、いろいろしらべた上でその名前は飛行犬とつけられた。今後もこの動物についてのけんきゅうはいろいろ行われるだろう。……

かわいそうなレオンの目には、涙がいっぱいになり、新聞を手からとりおとして泣きふしてしまいました。



一　まほうつかい

ハッジン　ナ　プン
ハッジン　ナ　プン
ハッジン　ナ　プン

ある寒い冬の晩でした。黒いきぬのとんがりぼうしをかむったいじのわるそうな老人が、へんな形をした炉のまえに腰をかけて、おそろしい声でこのまほうのことばをつぶやいておりました。そうして火の上にかけた大きななべの中で、グラグラにえたっているみようなものを、ていねいにかきまわしているのでした。

このふしぎな老人は、ジャム屋さんでもありませんし、鍋のスープに氣をつけているお料理番でもありません。また、のりをにているのでもありませんし、じゃがいもをにているのでもありません。では、いったい、なにをにているのでしょう？　それは、もっとふしぎな、あなたがたには、とても考えられないようなものをにているのでした。

この老人は、まほうつかいなのです。わるいちえばかりつかう、にせものの博士なので

す。ほんもののよい博士は、世の中の役に立つことや、りっぱな発明をするのですが、このまほうつかいは、土や、骨や、砂を、なべの中でにつめながら、まほうをつかってそれにいのちをふきこむのです。

今、この老人が、こしらえているのは、女のかたをこしらえているのですが、なんべんもやりなおして、だんだんうまくできそうになってきました。

七十三日と七十三夜、十三分と十三びょうまえから、このすばらしいなべは、たえずもえつづけている炉の上にかけられていました。ちょうど二十一日目に、なべを火からおろして、地面の上におき、まほうのことばをつぶやきました。

ハッジン ナ プン
ハッジン ナ プン

老人はなべの中から、いきなりきれいな小さいねずみをつかみ出しました。ねずみは、部屋中をかけまわっていましたが、やがて老人は、ねずみをつかまえて、なべの中にほうりこんで火の上にかけてしまいました。

いく日かたってまた、試験してみますと、こんどは、ふくろうが、なべから出てきました。またいく日かたってつかみ出してみると、いたちが出てきました。

「よしよし、だいぶわしの思うとおりになってきたわい。わしの術は、とても進んできたぞ。あと二日のうちに、どくへびをこしらえよう。それからめねこ、いちばんおしまいに、女の人をつくるのだ。しめしめ！ わしは、うまくなったぞ、うまくなったぞ。」

と、老人は手をたたいてよろこびました。

みなさん、この老人が、まほうつかいであるということを、よくおぼえておいてください。まほうつかいというものは、女の人をつくるにしても、いじのわるい、いやな女の人をつくることがすきなのです。もしも、よい博士でしたら、つばめとか、はととか、りょう犬とか、ひつじとか、かわいい動物をまずこしらえて、それから心のうつくしい、しとやかなおじょうさんをこしらえるでしょう。

このまほうつかいの老人は、一晩中、大なべの中をかきまわしています。そうして、わるいたくらみと、のろいのことばを、なべのなかにえているものにそそぎかけています。かきまわしているさじは、ぴかぴかした金のさじですが、そのさじをもつ手の指は、ひからびて、ほそくまがっていて、おそろしい爪がはえています。そのとがった指に、一つづつ銀のわをはめて、そのわには、ほうせきがキラキラ光っております。今夜も、この老人のまほうつかいは、金のさじでなべの中を、グルグルかきまわしているうちに、すっかりつ

かれきってしまって、夜のあけかかるころには、大きないすの上で、ぐっすりねこんでしまいました。

二　うすむらさきの洋服

ちょうどおなじ日の、おなじ時こくに、パリのおなじ町の、まほうつかいの家のむかいがわに住んでいる、小さいおじょうさんが、ぽっかりと目をさましました。

「ねえや、きょうは、とてもいいお天氣ね。だからあたし、おばさまにいただいた、あのきれいな、うすむらさきのお洋服をきたいわ。こんないいお天氣の日には、あたしもう、この黒いお洋服をきるのはいやよ。」

と、小さいおしゃれのおじょうさんがいいました。

「あの、おじょうさま、あなたのうすむらさきのお洋服は、まだアイロンがかけてございませんのよ。」

と、女中のロザリヤがこたえました。

「いいわ。今すぐ、アイロンしてちょうだいな。」

と、この小さいおじょうさんのゾエちゃんは、こましゃくれたちょうしでいいました。

「おじょうさま、それは、とてもむりですわ。おうちには、まだお火がおこしてございませんもの。」

「まあ、おまえは、いつでも、人がたのんだことをしないために、うまいいわけを考えつくのね。」

不平そうにそういいながら、ゾエちゃんはおきあがって、中庭へおりてゆきました。そして、まほうつかいのうちの、大きなストーブに、まっかな火がもえているのをみつけました。さあ、どうぞ、おはいりくださいといってるように、お部屋の戸が、すこしあいていて、炉ばたには、山のようにつんだ石炭が、カッカッとほのおをあげていました。

氣まぐれなゾエちゃんは、小さいくせに、えんりょなしの、わがままやで、すこしもこわいということを知りませんでした。ゾエちゃんは、お庭をよこぎって、まほうつかいのおうちへ平氣ではいっていきました。まほうつかいのおうちのまえにあるみぞを、一人でわたってはいけませんよと、いつもいわれておりましたのに、かまわずとびこえて、ずんずん火のそばへはいりこんでゆきました。

へんな老人が、身うごきもしないで腰かけているのを見たゾエちゃんは、思わずゾッとし

てあとずさりしました。その老人は、つかれきってグウグウ眠っていたのですが、なんともいえない、いじのわるい顔をしていたからです。

けれども、すこしたつうちに、そのおそろしさもきえて、ゾエちゃんは、大たんに炉のそばへ近よりました。炉の中にもえている石炭をぬすむためには、その上にかかっている大きなおなべをどけなければなりません。ゾエちゃんは、それはたいへん上手にやりました。おうちでは、火をいじってはいけないといわれているのに、ちゃんとシャベルまで用意して、できるだけ音を立てないように、いそいでよくもえている石炭をいっぱいとりました。

もし、小さい音でも立てて、老人が目をさましたらたいへんだと、ゾエちゃんは、ぶるぶるふるえていました。まるでだれかが、「あぶないことをしているね。」といっているような、へんな氣持がしました。

けれども、あのうすむらさきの洋服を、どうしても、きょうきたいということを思い出すと、きゅうに氣がつよくなりました。きょうは、おかあさまのおたんじょう日なので、そのおいわいにおまねきしたゾエちゃんのお友だちの小さいおじょうさんたちがおおせい、ゾエちゃんのおうちへくるのです。

……いつもより、ずっときれいになって、皆のまえに出よう……それを考えると、すっかり元氣になって、あたらしい勇氣が出てきました。この小さいゾエちゃんは、ほんとうにおしゃれさんでした。

シャベルの上にのるだけの火をぬすんでから、まほうつかいの火ばしを、炉ばたにそっ

とおいてにげ出そうとしたとき、ふと見ると、お鍋の中から、ふたつの大きな目玉がギョロッと光って、ゾエちゃんのお顔を、じっとみつめているのでした。ゾエちゃんは、おそろしさのあまり「アッ！」といって、シャベルを手からとり落したとたんに、まほうつかいが目をさましてしまいました。

三　まほうにかかったゾエちゃん

たとえば、えかきがよい絵をかくためにも、詩人がすばらしい詩をつくるためにも、博士がりっぱな発明をするためにも、人間は、何年も勉強したり、苦労したりしなければなりません。

けれども、子供のときには、そのことがよくわかりません。きれいなお人形をもらったりするのが、いちばんたいせつなことと思うでしょう。それも、もしこわしてしまえば、また買ってもらえばよいと思っているでしょう。しかし、ほんとうによい子供たちは、ものを大事にすることと大人のお仕事をうやまうことをよく知っています。

ゾエちゃんは、大人のお仕事のむずかしいことをすこしも考えないで、火をとるために、

そのなべをうごかしたのです。そうしてまほうつかいが何か月もかかって、同じ熱さの火をもやしつづけるためのたいへんな骨折りをすっかりむだにしてしまったのです。

まほうつかいにとっては、たいへん苦労した、すてきな発明を、なにもかも、みんなだめにしてしまったのです。それと知ったまほうつかいの老人の、がっかりした顔の、おそろしいことといったら!!　あんまりおこったために、まっ青になって、自分で自分の手をねじりながら、口もきけないほどでした。そのあげくに泣き出してしまいました。どうでしょう！　まほうつかいが泣いたのです。なみだ!!!　まっくろななみだが目にいっぱいになって、ポツリと白いしき石の上におちて、まるで黒いインキを二しずくたらしたようでした。

ゾエちゃんは、ブルブルふるえながら、老人のまえにひざまづいて、どうぞゆるしてください とあやまっていましたが、老人は、ちっともききいれようとしないで、ものすごいのろいのことばをはきかけるのでした。

やがてなべを手にとって、まだふたつの目玉がギラギラかがやいている中へ、おそろしさに氣をうしなってしまった、かわいそうなゾエちゃんのお顔をつっこんでしまいました。そうして、れいのまほうのことばをとなえながら、ゾエちゃんのまわりをなんべんもグルグルまわりました。

ハッジン　ナ　プン
ハッジン　ナ　プン
ハッジン　ナ　プン

見る見るうちに、ゾエちゃんは、すっかりゾエちゃんではなくなってしまいました。ふつくらしたかわいらしい手は、長い爪をはやし、やさしい青いひとみは、緑色の大目玉になり、その金色のかみの毛は、一枚のあつぼったい毛皮になってしまいました。そうして、うつくしい顔がごじまんだったゾエちゃんは、とうとう大きなみにくいねこになってしまいました。

氣がついたとき、ゾエちゃんは、自分がねこになってしまったことがわかりましたので、とてもかなしくなってしまいました。なにかしゃべろうと思っても、どうしてもお話しすることができません。ゾエちゃんのやさしい声……おかあさんは、その声を聞くと、どんなにゾエちゃんがいたずらしたときでも、しかることのできなかったそのかわいい声で、お話ししたいと思いましたが、どうでしょう。

ゾエちゃんの声は、ことばになって出なくなってしまったのです。ニャアオ、ニャアオとなくばかりです。しかも、そのニャアオは、にせもののニャアオなのです。なぜかという

と、このまほうつかいは、ねこをこしらえたのははじめてなので、ほんもののねこのようなやわらかい声を出させることができなかったのです。そのうえ、このできそこないのねこは、ねこらしいしなやかさも、やさしさももっていませんでした。

まほうつかいは、女の人をつくるまえに、ねこをつくるはずだったことを思い出しました。ですから、このねこが、あまり上手にできなかったことを、たいしてざんねんだとも思いませんでした。

かわいそうなゾエちゃんのなき声は、まるで木のたばこいれのふたをあけるときのように、ギュウギュウといったような、いやな音なのです。それでさすがに、まほうつかいの老人も、このかなしそうな金切声をきくのがいやになってしまいました。

ねこのゾエちゃんが、まごまごしてかなしそうにないているとき、中庭のほうで、女中のロザリヤが、

「ゾエちゃん、ゾエちゃん!!」

と、そこらじゅうをよびながら、さがしている声がきこえてきました。

「おお、おお。」

と、いじわるな老人は、あくまのように笑いながらいいました。

「ほら、おまえをよんでいるよ。私のうつくしいかわいいねこよ。さあ、ゆけ。おまえのおかあさんは、おまえが、りっぱな身なりをしているのを見て、さぞおよろこびだろうよ。さあ、ゆけ、ゆけ。いっておかあさんに、おまえのあたらしい着物を見せておあげ。このあたらしい洋服は、はじめのうちは、すこしきゅうくつだろうな。そうだろう、けれども、じきになれるよ。

そこでわしは、おまえにやくそくしておこう。だれかが、おまえに、——ゾエ、私は、おまえをゆるしますよ。——といってくれるまでは、けっしてこの毛皮をぬぐことができないことを。

かわいそうな小さなむすめよ、こうなったのは、けっして、わしのせいじゃないぞ。そうしてまほうつかいは、ふとったねこを、ポンとけとばして、中庭の方にほうり出してしまいました。

四、ねこのきらいな人たち

「ゾエちゃん、ゾエちゃん、お食事ですよ。ゾエおじょうさま、おかあさまが、およびで

ございますよ。」

それから、女中のロザリヤは、

「ペシャールさん、ゾエおじょうさまを、ごらんになりませんでしたか？」

と、門番のおじさんにたずねました。

「いいや、ねえやさん、私は、きょうは、まだいっぺんも、ゾエおじょうさまをお見うけたしませんよ。」

「ゾエちゃーん——」

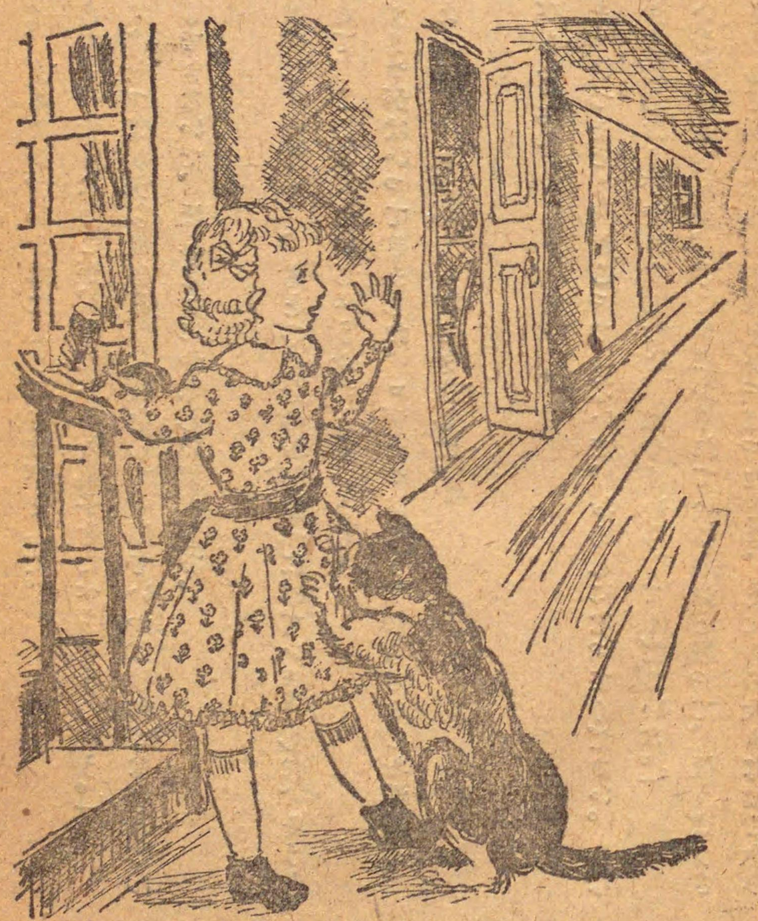
自分の名を、なんべんもよばれたので、ねこのゾエちゃんは、いそぎ足で、かいだんをかけあがって、声のする食堂へはいろうとしたとき、女中のロザリヤに後足をふまれました。

「おお、いやだ！　なんだい、このきたならしいドラねこは？　サッサと出てゆきなさい。あたしは、ねこが大きらいよ。しっ、しっ。出ていけ。」

かわいそうなゾエちゃんは、どうしても出てかないければなりませんでした。かなしそうにニャアオとなきながら、かいだんをおりていこうとしたとき、とてもおいしそうなジャムのついたお菓子を手にもって、いとこが食堂から出てまいりました。そして、

「ゾエちゃん、ゾエちゃん、早くお食事にいらっしゃいよ。おいしいジャムがあってよ。」

と、ゾエちゃんをさがしながらよびました。ゾエちゃんは、ねこになっていることをわすれてしまって、いとこのそばにいきました。そうしておなかがすいたので、いとこが手にもっていた、お菓子をとろうとしました。けれどもく



いしんぼうのいとこは、まるでひっかかれたようにさけびました。
「おかあさま、おかあさま、大きなねこが、あたしのお菓子をたべちゃうわよう。」
ふしあわせなねこは、やっぱりうらめしそうな顔をして、出ていかなければなりませんでした。朝のお食事もできないで、ほんとうにかなしい氣もちで。

ねこのゾエちゃんは、しょんぼりと、もとの自分のお部屋へにげていきました。そうして自分の寝台の上にねて、ここならだいじょうぶだと思いました。
そこへ、女中のロザリヤがはいってきました。ロザリヤは、うすむらさきのお洋服を、すっかりあたらしいようにアイロンしてもってきました。
「ゾエちゃん！」
と、ロザリヤはよびました。
「さあ、おじょうさま、いつまでも、おこっていないで、おめしになってください。あなたのお洋服は、すっかりおしたくができましたよ。はやくいらしてくださいな。」
ロザリヤは、小さいおじょうさんが、どこかにかくれているのかと思って、ほうぼうさがしまわりました。そうして寝台のおふとんをひっぱったとき、またあの大きなねこをみ

138693

つけました。ロザリヤは、たいへんないきおいでかけよってさけびました。
「あら、またきたならしいねこがここにいたよ。ゾエおじょうさまのおふとんに、ぬくぬくねそべっているよ。あっちへいかないか。しっ、しっ。」
そうしてけったり、ほうきでぶったりして、追い出してしまいました。
ゾエちゃんは、すっかりこわくなって、またロザリヤにひどくうたれないうちにと、大いそぎでにげていきました。そうしておかあさんのお部屋のまえにうずくまって、おかあさんが出るのを待っていることにしました。待っているあいだに、こんなことを考えました。
「あたしは、まほうつかいのために、ねこになってしまっているけれど、おかあさまは、きっとあたしをわかってくださるわ。あたしが、お話しすることができなくても、きっとあたしだということがおわかりになるわ。ああ、きっと思い出してくださるわ。あんなにあたしをかわいがってくださるいいおかあさまですもの、きっとおかあさまは、あたしをこのふしあわせからすくい出してくださるわ。」

五　かなしいおいわい日

ゾエちゃんが、しっぽをまいてうずくまっているとき、二人のいとこがはいってくるのを見ました。きれいなお洋服をきて、たいへんきれいになって、小さな両手には、大きな花たばをもって、くつのつまさきで、元氣よくあるいてきました。

「おばさまは、まだお目ざめになりませんの？　わたくしたち、おいわいにうかがいましたのよ。ゾエちゃんは、どこにいらっしゃるの？　この花たばを、お水に入れてちょうだいな。」

「ゾエおじょうさまは、たぶんお部屋でございましょう。」

けさから、どんなことがあったか、すこしも知らない、ほかの女中さんがこたえました。

「ああ、きっとそうよ。」

年上のいとこがいいました。

「きっとそうよ。ゾエちゃんは、あの毛糸のまりがまだできないのよ。おばさまのおたんじょう日までにできるはずがないって、あたしいったでしょう。あたし、おばさまにさしあげるレースあみは、もう八日もまえにできているのに。」

といいながらいとこは、おばさんにあげるために、自分であんだうつくしいレースのそで口を見せました。

ゾエちゃんは、うつくしくきかざったいと

こたちや、そのおくりものや、その花たばを見て、むねの中は、かなしさでいっぱいになりました。ゾエちゃんだって、おかあさまのおいわいにさしあげるものを、すこしもおくれないように、毛糸でかがったまりも花たばも、すっかりそろえてあるのに！　それだのに、どうして、このいやらしくふとったきたないねこの四つ足で、もっていくことができるでしょうか？

このときほど、ゾエちゃんは、自分をふしあわせだと思ったことはありません。けれども、これくらいは、大したことではありません。もっとかなしいときがくるのです。

一時間ばかりたって、おかあさんが、ベルをならしたので、ほかの女中さんが、お部屋にはいろうとしたとき、ロザリヤかびっくりしてとんできました。

「もしおくさまが、ゾエおじょうさまのことをおききになりましたらね、お花を買いに、わたしが、おともをして出かけたって、おっしゃってくださいね。そうすれば、もういつぺんさがしてみますからね。ほんとうにおじうさまは、どうなすったのでしょうねえ。あ、ああ。」

と、きのどくなロザリヤは、すすり泣きながらいいました。

「もしおじょうさまに、不幸なことがあったら、あたし、死んでしまうからいいわ。」

ゾエちゃんは、ロザリヤが自分のために泣いているのを見て、すっかりしょげてしまいました。そうして、ロザリヤが、ねこになった自分を、わからないことを、ついわすれてしまって、話しかけてなぐさめてやろうと思い、足もとにすりよりました。ロザリヤは、ねこを見ると、むこうへおしやりましたけれど、もう足でけりもしなければ、ぼうでなぐりもしませんでした。ロザリヤはしんぱいごとで、むねがいっぱいで、ねこに、いじわるをしているひまがなかったのです。

やがてゾエちゃんが、ゆくえふめいになったうわさが、近所じゅうにつたわって、たれも、かれも、しんぱいして、コソコソと話しあっておりましたが、ときがたつにつれて、ゾエちゃんに、なにか不幸なことがあったにちがいないと、みんな思うようになりました。

おかあさんは、ひょっとすると、ゾエちゃんが病氣にでもなっているのを、だれかが、かくしているのかもしれないと思って、ゾエちゃんの部屋にはいってみました。

ねこのゾエちゃんは、おかあさんが、自分のまえを通るのを見て、むねがドキドキしました。自分もいっしょにかけ出して、おかあさんの後をおおうとしました。——きっと、あたしをわかってくださるにちがいないわ。と思いながら。けれど、いやなスペイン犬が、

おかあさんのそばをはなれずについているので、こまってしまいました。おかあさんは、通りすがりに、このあわれなねこを見つけましたけれど、それが、家のかわいいむすめだということは、夢にも思いませんでした。

そのうえ、おかあさんがかってい

らっしゃるカニッシュ、ルブレット、カルランという三びきの犬が、みんなでかわいそうなゾエちゃんにせめよったので、ゾエちゃんは、びっくりして、大いそぎで屋根の上にかけあがりました。けれども、ゾエちゃんは、なりたてのねこなので、まだ屋根にのぼることになれませんからたいへんな骨おりでした。

さて、みんなはロザリャがかえってくるのをただひとつのたのみにして、待ちわびました。ロザリャが、きっとゾエちゃんをつれてかえってくるか、なにかいい知らせをもってくるだろうと、そればかりを待ちこがれていましたけれど、ロザリャは、とうとうかえってきませんでした。ああ、このきのどくな女中さんは、もうかえっては、こないでしょう。

おかあさんは、子供の名を、のどのはりさけるような声でよび立てました。

「ゾエちゃん！　ゾエちゃん！　ああ、あたしのかわいい子!!　もうけっして、おこごとをいいませんから、かえってきてちょうだい!!」

そうして、家中の、お部屋というお部屋から中庭からおく庭までさがしまわりました。おかあさんは、ふだんは、やさしい方でしたが、この時だけは、氣みじかになって、らんぼうに女中たちをしかりとばしたあげく、みんなに、町中をさがさせました。

時間は、ずんずんたちましたが、ゾエちゃんのゆくえは知れません。おかあさんは、お

友だちのお家から、近所のお家から、しんるいのおうちから、交番から、警察まで、のこるくまなく使を出して、たずねましたが、一人として、ゾエちゃんのゆくえを知っているものはありませんでした。

そのうちに、いやな考えばかりがおかあさんの頭に浮んでくるのでした。じぶんのむすめは、死んでしまったのではないかしら？　水におぼれたのではないかしら？　それとも、だれか、わるい人がいて、さらっていったのではないかしら？　そう思うと、いくらかのぞみのあるような氣もしました。

「あたしのおじょうちゃん！　あたしのおじょうちゃん！」と、ゾエちゃんのおかあさんはさけびました。

「ああ、神さま！　どうぞ、ほんとうのことを、おっしゃってくださいまし。わたくしは、もう一度むすめを、見ることができるのでしょうか？　いったいわたくしのむすめは、どうなりましたのでしょうか？　ああ、どうぞ、わたくしに、なにも、かくさないでおっしゃってくださいまし、おねがいでございます。」

おかあさんは泣きました。まるで心をたちきられるようにむせび泣きました。

このおかあさんは、ほんとうにかわいそうなのです。でも、このとき、この世の中に、

もっとかわいそうなものが、もう一人ありました。それは、いうまでもなく、ねこになったゾエちゃんです。

ゾエちゃんは、じぶんのおかあさんのかなしいさけび声を聞きながら、——ここにいるのよ。——ということができないのです。こんなつらい目にあった子供は、めったにいないでしょう。おかあさんが、こんなにかわいがってくださることも、こんなに泣かれることも、ほかの子供は知らないでしょう。それだのに、ゾエちゃんだけは、こんなおそろしいかなしい目にあって泣いているおかあさん、じぶんのために不幸なめにあっているおかあさんを、目の前に見たのです。

ゾエちゃんは、まほうつかいの家にいって、よくおわびをして、もとの姿にかえしてくれるようにたのんでみようと考えつきました。しかしまほうつかいの老人は、腹を立てて、どこかへ出かけてしまっておるすなので、どうすることもできません。

ゾエちゃんは、ひと晩じゅうションボリと中庭にうずくまって、おかあさんのいるお部屋のあかりを見つめていました。おかあさんは、病氣になってしまったのでだれかが、看病しているのでしょう、あっちへいったり、こっちへ行ったりしている人影が、ガラス窓にうつっています。ゾエちゃんは、その影をせつなそうに見あげていました。

ゾエちゃんは考えました。お窓がすこしあいたら、そこからおかあさんの寝台のところまでしのびこんでいこう！　でも、あのおそろしいスペイン犬が、しじゅうそこにいることでしょう。ゾエちゃんは、がっかりしましたが、ふと、また、べつのことを考えつきました。

それは、じぶんが、どういう身の上になってしまったかということを書いて、すこしでもおかあさんを安心させようということです。けれども、ねこのゾエちゃんは、ペンもインキも、何も書くものをもっていません。爪で、かべをひっかいて、書いてみようとためしましたが、かべがかたくてすこしも爪が立ちません。もし書けたとしても、かべの上のこのことばを、だれが、本氣で読むでしょう。

「あたしの大好きなおかあさま、泣かないでくださいな。あたしは、ねこになっています。」

六　手紙

やがて夜があけました。ゾエちゃんは、じぶんのために、苦しんでいるおかあさんが、

どうしているか知りたくて、屋根にかけあがってみました。けれども、屋根の上からは、ちっともお部屋のようすがわかりません。

そのときおとなりのおうちで、だれか窓をあけている音がしたのを、ゾエちゃんは聞きつけました。そっとのぞいてみると、きれいなお部屋の中には、あたたかそうにストーブの火がもえています。机の上には、大きなあつぼったい英語の辞書がおいてあります。そして本棚の上にはつぼにさした、お花がかざってあるのが見えました。そのお部屋を見てゾエちゃんは思いました。

「ああ、そうだわ。ここでお手紙を書きましょう。」

まず窓の上にかけあがって、中を見ると、だれもいませんので、思いきってゆうかんにお部屋の中へとびこみました。

ゆかの上におりてみると、画用紙を入れた紙ばさみの上に、けしゴムのかわりにつかうパンがひときれのせてありました。きっと、まもなく、だれかがはいってきて、写生をするのでしょう。——ゾエちゃんは、きのうの朝から、まだなにもたべていませんので、このパンを見ると、どうしてもたべたいという氣持をこらえることができませんでした。

すっかりたべてしまって、あたりをキョロキョロ見まわしました。どんな小さなパンく

ずでも、まだのこっていたら、みんなのみこんでしまったことでしょう。

このすばらしいお食事のあとで、さっそくおかあさんに、お手紙を書きたいと思いました。テーブルのそばにあるいすの上にとびのって、まず前足で、ペンをとりました。足でペンをもつことも、読めるような字の形を書くことも、まあ、なんてむずかしいことでしょう。

やっとのこと、なにか形が書けたので、ゾエちゃんは、これを字だと思って、もういっぺん読みかえしてみようとしましたが、じぶんでも、何がなんだか、さっぱり読めません。ジグザグだの、三角だの、ひし形だの、まるで、めちゃくちゃです。ねこの足で、どうして、これいじょうのものがかけるでしょう！

ゾエちゃんは、これを見ると、もうがまんできないで、じぶんの足を、インキつぼにつっこみ、インキを、ぽたぽたたらしながら、こんどは、爪で書いてみようとしました。そうして、紙の上に、五たびも書いてみたのですが、まあ、どうでしょう!! インキのしみばかりで、まるでインキ屋のお店のようです。おまけに、インキつぼをひっくりかえしてしまって、テーブルの上の紙も、いすも、二三さつの本も、インキだらけになってしまいました。

その時、だれかお部屋にはいってきました。それは、十六七のきれいなおじょうさんでしたが、見たこともない大きなねこが、テーブルのまえで、何か書いているのを見つけました。エグラン・チーヌというこのおじょうさんは、ちっともおこりませんでした。字を書こうとするなんて、めずらしいりこうなねこだと思って、ゾエちゃんの頭をなでてかわいがりました。そうして、あめチョコだの、ビスケットだの、じぶんの朝ご飯にとっておいた、おいしい牛乳だのを、みんなねこにやりました。ゾエちゃんは、このおじょうさんが、ときどき、自分に勉強をおしえてくださって、——ゾエちゃん、あなたが、字を書くことをおぼえたら、ほんとうにうれしいと思う時がきますよ——といってくださったおねえさんだということを思い出しました。

それといっしょに、ゾエちゃんは、まほうつかいがやくそくしたことばを思い出しました。——おまえが、もとのとおりの女の子の姿にかえれるのは、だれかが、おまえに、(ゾエ、あたしはおまえを、ゆるしますよ——) といった時だ。——

ゾエちゃんは、このやくそくのことを考えて、勇氣をとりもどしました。そうしてもう、じぶんをかわいがってくださるようになった、きれいなエグランチーヌが、いつか、——ゾエ、あたしは、おまえをゆるしますよ——といってくれるような氣がしてきました。

七　こころみ

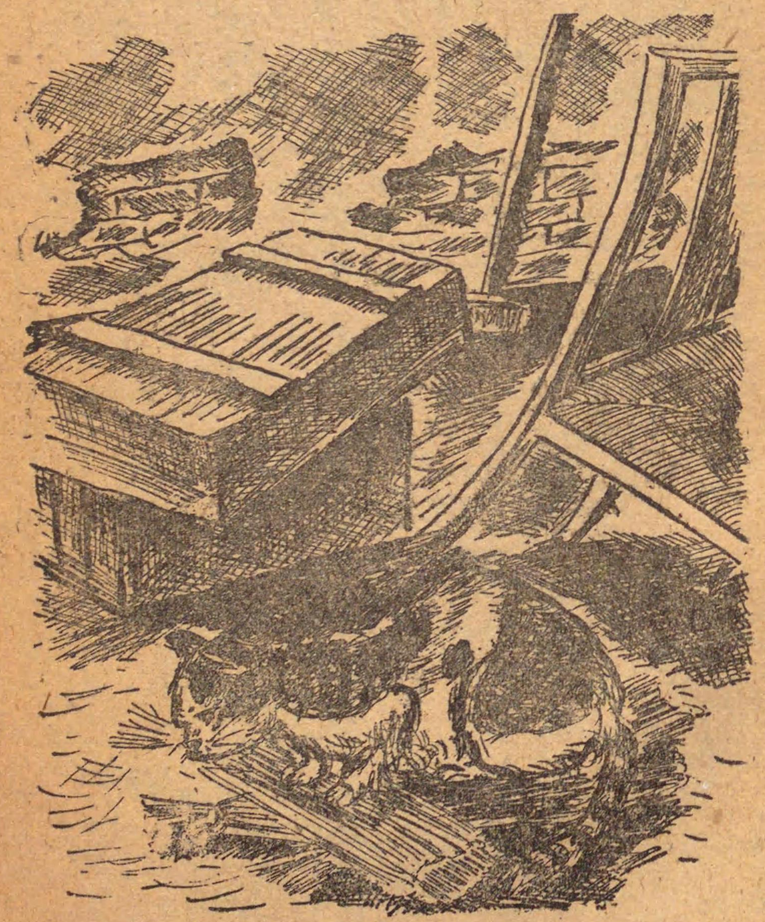
おかあさんのことが氣になるので、ゾエちゃんは、夜になってから、また家へかえりました。けれども、おかあさんはおるすでした。それは、おうちの人たちが、おかあさんの病氣が、もっとひどくなることを心配して、おかあさんを、おうちからはなれさせたのでした。おかあさんは、イタリーへ旅行にいかれたのです。

ゾエちゃんは、たいへん悲しうございました。じぶんのために、心の底から苦しんでいらっしゃるおかあさん、いつまでも、なぐさめられることのないおかあさんに、ほんとうにすまないと思いました。そうして何んとかして、この苦しい身の上からぬけだして、おかあさんを安心させなければならないと、心にちかいました。

その晩、ゾエちゃんは、物置の中にかくれていましたが、そこは、とても寒いので馬屋の中の方がよいと思いましたけれど、馬はこわくてあぶないので、うまやにはいる氣になれませんでした。

あくる朝、エグランチーヌの窓があくのを待ちかねて、ゾエちゃんは、かえってきました。エグランチーヌは、きのうの朝よりも、もっとうれしそうにゾエちゃんをむかえてくれました。

「ミネー、ここへいらっしゃ



い！」

と、おじょうさんがよびましたけれど、ゾエちゃんは、そのききなれない名に、返事するのはいやでしたから、わざと、そっぽをむいていました。

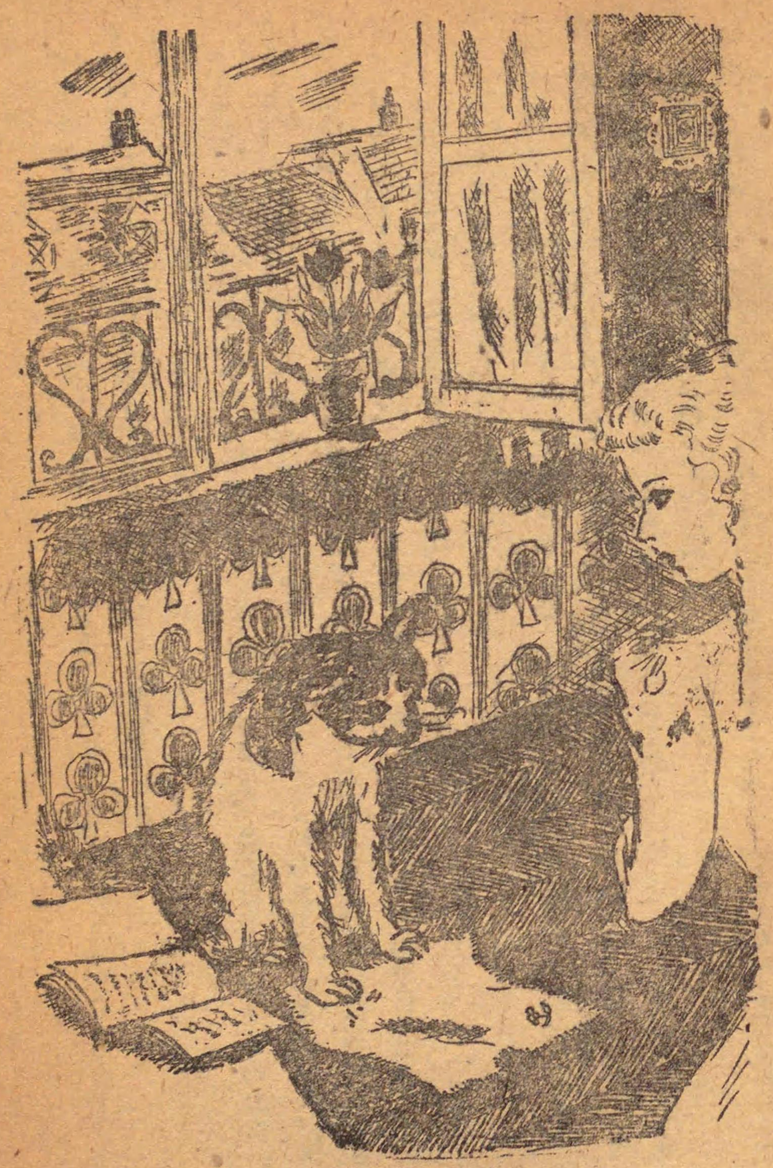
「ミニョンヌ！」

エグランチーヌがまたよびましたが、ゾエちゃんは、この名にも、返事をするのはいやでした。

「だけどねえ、おまえは、もう私のものだから、どうしても、名をつけなくちゃねえ。けれど、おまえのすきな名があっても、おまえは、あたしに、なにもいうことができないのねえ。」

これを聞いたゾエちゃんは、ある考えが光のようにチラッと頭にうかびました。すぐ窓にとびあがって、屋根の上をつたわって、もとのじぶんの家へかけつけました。やがてかいだんをとびあがり、じぶんのおへやの戸のところまできました。

家の人たちは、みんなあとかたづけにいそがしくしていたので、だれも、ねこのゾエちゃんがはいってきたのに、氣がつきませんでした。そこでゾエちゃんは、洗って、ひきだしの中にしまってあった小さいハンケチを、うまくとりだして、おおいそぎでもどってき



ました。

ゾエちゃんは、エグランチーヌのところへきて、くわえてきたハンケチをひろげて、じぶんの名がぬいとりしてあるところを、前足でおさえてみせました。

「ゾエ」

エグランチーヌは、それを、高い声で読みました。すると、ねこはすぐおひざの上にいきました。それから、もう一ぺんよんでもらうために、すこしはなれてすわりました。エグランチーヌは、ためしにまた、ほかの名でよんでみましたが、ねこはそのたびに、小さいハンケチにぬいとりしてある「ゾエ」という名を、足でさしてみせるのでした。エグランチーヌは、ねこが、この名よりほかには、返事をしないということがわかったので、それにきめてやることにしました。

ほんとうなら、かいぬしがねこに名をおしえてやるのですが、ここでは、あべこべで、ねこの方から、ご主人によんでいただきたい自分の名をわからせたのです。こんなことは、めずらしいことですが、エグランチーヌは、犬やねこのなかには、たいへんちえのあるものがいることを知っていたので、べつだんおどろきませんでした。

さあ、これで、ゾエちゃんは、ほんとうの自分の名をよんでもらうことになったわけで

す。

「あたしは、おまえをゆるしますよ。」

あとは、これだけのことをいってもらえばいいのです。なにか、ちょっとわるいことをして、そのことばをいっていただくようにしむければよいのです。

それには、どういうふうにしたらよいか？　まずわるいことをして、ご主人をわざとおこらせて、それからゆるしていただくのはあまりやさしいことではありません。

ある日、たいへんおいしそうなボンボンの大きな箱をいただいたエグランチーヌは、それをお部屋においておきました。ねこは、すきを見て、しめたとばかり、すばしっこくたべちらしてしまいました。そうして若いご主人が、かえってくるのを、うれしそうに待ちかまえました。きっとエグランチーヌが、こごとをいって、そのあげくに、

「ゾエ、あたしは、おまえをゆるしますよ。」

といってくださるだろうと思って、たのしみにしていました。

ところが、ゾエちゃんのあてははずれました。エグランチーヌは、ちっともくいしんぼうではありませんでしたので、ゾエちゃんがボンボンをたべちらしたのを見ても、おこる

どころではありませんでした。
「あら、よくたべたのねえ。おまえのために、それをとっておいてあげたのが、わかったのでしょう？」
と、にこにこしていいました。ちっともしかられないで、こんなにやさしくされることが、ゾエちゃんには、いやだったのでした。

エグランチーヌは、画をかくことがとても上手でした。五六日まえからとりかかっている風景画を、はやくしあげて、おとうさんにお目にかけようと思って、いっしょうけんめいにかいていました。この画は、たいへんうまくできて、あともうすこしクレヨンでぬれば、すっかりできあがるところでした。

ゾエちゃんは、ご主人が、この画をたいへん大事にしているのを知っていたので、これをこわしてしまったら、きっと大おこりにおこるだろうと思いました。そこである日、エグランチーヌが、ちょっと出かけたすきをねらって、ねこは、この画をやぶって、ばらばらにしてしまいました。クレヨンをすっかりなめてしまったので、木も、水たまりも、牛も、家も、ごちゃまぜになってしまいました。

このいじらしくもうつくしいいたずらがすむと、ゾエちゃんは、テーブルの下にかくれて、わかいご主人がおこるのを、今か今かと、まちかねていました。

まもなく、エグランチーヌはかえってきました。そうして、どうしてこの画が、ばらばらの紙くずになって、しきものの上にまきちらされているのかと、ちょっと考えこみました。大事にしていた画を、こんなにしてしまったので、こんどこそは、おこられるだろうと思ったゾエちゃんは、まっていたのに、エグランチーヌは、笑いだしてしまいました。

「もし、おとうさんがごらんになったら、きっと、あたしのことをおからかいになるでしょうね。そんなことは、ちっともかまわないけれど、でもおとうさんは、どうしてねこをかっているのかって、おききになるわ。」

といいながら、画のやぶれくずをひろいあつめて、ストーブの火の中へなげこんで、ゾエちゃんのしたいたずらが、あとものこらないようにしてしまいました。そうして、まるで何事もなかったように、もう一度画をかきはじめました。エグランチーヌのお顔には、くやしそうなかげも見えませんでした。

ゾエちゃんは、こんどこそ、うんとおこられるだろうと思って、かくれていたところから、元氣よくとびだしてきました。そうして、よくおわびして、

「ゾエ、あたしは、おまえをゆるしますよ。」
といつてもらおうと思つて、うれしくてたまりませんでした。
けれどもエグランチーヌは、すこしもおこごとをいいませんでした。
「ゾエ、はやくおかくれなさい。おとうさんがいらっしゃるわよ。おとうさんが、ねこきらいのことをおまえよく知っているでしょう。」
といいました、ゾエちゃんは、またあてがはずれてしょげかえって出てゆきました。

八　二どめのためし

五六日たちました。ある日のこと、若いやさしいご主人のお部屋へ、女中さんが、バラの花たばをもってきました。これを見たゾエちゃんは、やっとまた元氣をもりかえしました。
エグランチーヌがうつくしいかみをゆっているとき、女中さんは何の氣なしに、その花たばをエグランチーヌの寢台の上におきました。
きょうだいの前にこしかけていたエグランチーヌには、じぶんのまわりのことが、なに

も見えませんでした。ゾエちゃんのご主人は、今晩、夜会にお出かけになるので、よいお洋服をきるのです。それで、かみかざりにつけるバラの花たばは、大事なのでした。
ゾエちゃんには、これは、たいそうよいおりでした。さっそく花たばをくいちらして、いたずらをしてやろうと思いつきました。
エグランチーヌは、ボンボンをたべられても、大事な画をやぶられても、がまんしていましたが、この花たばをだいなしにしてしまったら、平氣ではいられないでしょう。
かがみを見ながら、エグランチーヌが、今夜の夜会のお話や、かみがたいへんよくゆえたことなどを、女中さんとたのしそうにお話しているあいだに、このいたずらねこは、しんだいの上にはいあがって花たばのま上にねころんで、足でたたいて、花を一つおしつぶしてしまいました。
ちょうどその日は、ひどい雨ふりでした。ゾエちゃんは、花たばをくわえて、おおらいへとび出しました。そうして、このきれいな花たばを、どろだらけにして、めちゃくちゃにしてしまいました。ちょっとのあいだに、どの花も、よごれてぬれて、ぐしゃぐしゃになってしまいました。野の花なら、いくら雨にあっても、お日さまが出れば、また生きかえりますが、切り花は、どうすることもできません。ねこはそれをくわえて、またしんだ

いのうえにかえってきました。

かわいらしいかみができあがって、バラの花たばを、エグランチーヌの頭の上につけようとした時、女中さんは、しんだいの上に、うつくしい花のかわりに、ねこの二つの耳をみつけたのでびっくりしてしまいました。

みすぼらしいあわれな花たば、きずついて、ぶらさがって、どろだらけになって、まるでどうけおどりのぼうしにでもつけそうな、みっともない花たば！

「おじょうさま、まあ、どうしたんでしょう？　これでは、とても、おぐしの上につけられやしませんわ。」

と、女中さんはあきれかえって、花のちってしまったあわれな花たばを、手にもってみせました。

エグランチーヌは、おしゃれではありませんでした。うつくしくて、かしこいおじょうさんでした。このどろだらけな花たばを見ても、ちっともおこらないで、笑いながらいいました。

「きょうは、バラの花たばをつけるのはやめましょうね。いつかつけた白いリラの枝ね、あれをとってちょうだい。白いきぬのお洋服には、どのお花でも、よくにあうからいいわねえ。」

これをきいてゾエちゃんは、どうすることもできないほどがっかりして、あんまりがまんづよいご主人に、すっかり腹を立てて、お部屋の外へとびだしてしまいました。

「あの方は、どうしてこんなに、おしゃれでないのかしら？　ほかのおじょうさんたちは、

みんなおしゃれのために、すいぶん氣をつかっているのにねえ。あの方は、なんでもほしいものを買っていただけるご身分なのに、おしゃれにつかうものをこわされても、ちっともおおこりにならないんですもの、ほんとうに、いやになってしまうわ。」

ゾエちゃんは、エグランチーヌのやさしいのが、まるでわるいことでもあるようにおもわれました。また、エグランチーヌがあんまりやさしいので、こちらのしたことがみんなだめになってしまうことも、くやしくてならないのでした。

ゾエちゃんは、おかあさんをかげながら見ることもできず、ものたりないかなしい日をすごしているうちに、一月たってしまいました。そうして、やさしいご主人が、じぶんが何をしてもおこらないので、こまっておりました。ほんとうに心配させることをしなければ、エグランチーヌを、おこらすことはできないと考えました。じぶんがもとのすがたになるためには、どうしても、こんなにしんせつな、なさけぶかいエグランチーヌを苦しめるような、愚知らずなことをしなければなりません。

エグランチーヌには、一人の小さな弟がありました。うちの人たちは、子供が、ねこにひっかかれることをおそれて、ぼうやのお部屋には、けっしてねこをいれないように氣

をつけていました。

ある日のこと、みんなが氣をつけていたのにもかかわらず、ゾエちゃんは、スキをねらって、ぼうやのゆりいすのそばへしのびこみました。なんにも知らないぼうやはにこにこして、よろこんで、ねことあそぼうとしましたが、ねこのゾエちんは、わざとおこらせるために、ぼうやのほっぺたをひっかこうとしました。

しかしそのたくらみは、思ったようにうまくはいきませんでした。ぼうやがふりかえったので、ほっぺたをひっかこうと思ったのに、かわいそうなぼうやのまぶたのところに爪を立ててしまいました。

ワーッと泣き出した声を、エグランチーヌがききつけました。エグランチーヌは、こんどこそ、ほんとうにおこりました。そうしてゆるしてやるとはいわないで、ねこをおいはらってしまいました。

このことがあってからのち、ゾエちゃんは、エグランチーヌのおうちに近よることもできず、屋根の上をうろうろしてかなしそうにないているだけでした。ぼうやの目がまだなおらないでねていることも、エグランチーヌがもうちつともじぶんをかわいがってくれな

いことも、りこうなねこはよくは知っていたのです。

ある晩、とてもかなしい氣持で、屋根の上にうずくまって、じぶんのしたわるいいたずらを思い出して考えこんでいた時、エグランチーヌの小さい弟がねているお部屋のあたりが、きゅうに、パッとあかるくなったのに氣がつきました。

それは、子供のしんだいのそばにおいてあったランプの火が、窓のカーテンにもえうつったのでした。おうちの人たちは、みんなお夕はんをたべていましたので、ちっとも氣がつきませんでした。

そのうちに、お部屋の中は、ほのおでいっぱいになりました。ぼうやは、けむりにまかれて、泣きさけんで知らせることもできませんでした。ねこになってはいましたが、ゾエちゃんの頭はまだすっかりばかになってはいませんでした。

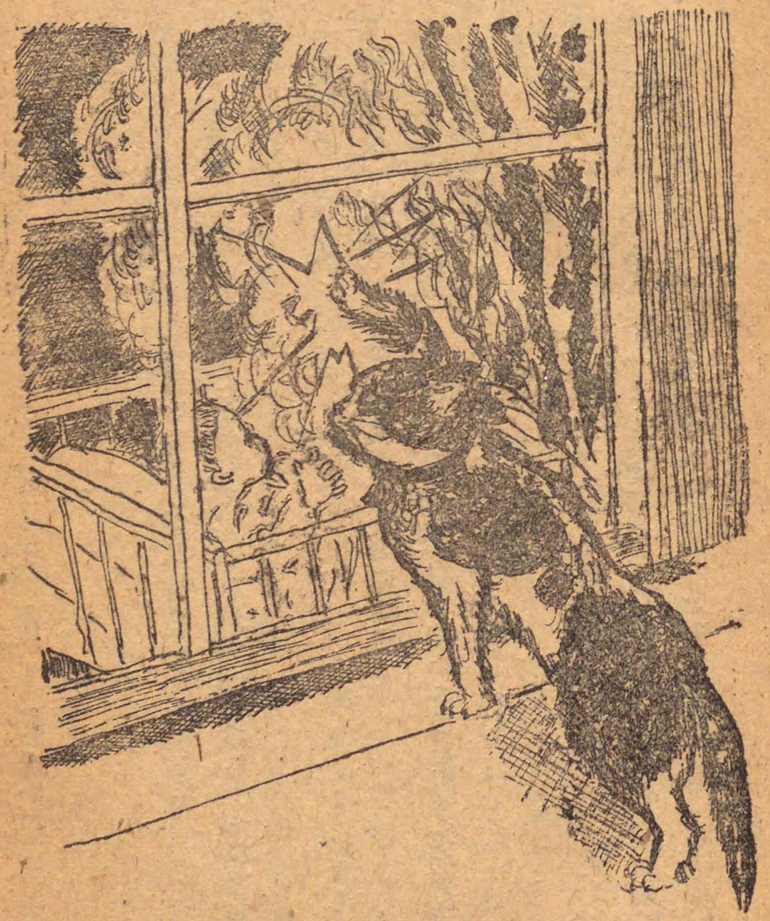
パッと氣がついて、ゾエちゃんは、ぼうやのお部屋にかけつけました。そうして足をけがすることもかまわず、窓ガラスをうちこわしました。こわれた窓からとびこむが早いか、ゾエちゃんは、ベルのところに走っていって鳴らしました。リンリンリンリンとものすごくベルを鳴らしましたので、家じゅうのものがびっくりしてかけつけてきました。

エグランチーヌも、いそいでとんできて、いきなり火の中をくぐって小さい弟を両手

にかかえてたすけ出しました。

みんなは、すっかりむちゅうになっていたので、ベルにぶらさがっているねこのゾエちゃんには、だれも氣がつきませんでした。

けがひとつしないでたすかった小さいぼうやは、まわらない



舌で話しだしました。だれも考えられないような、ふしぎな、思いもよらないねこのはたらきでたすかったことを話しました。

「ねこのおかげなのよ。」

とぼうやがいった時には、みんなはもう一度そのねこを見たいと思いました。

「もしあれがいなかったら、子供は、けむりにまかれて、いきがつまってしまったでしょう。なんてりこうなねこでしょう。」

「あぶないということが、ねこにわかったんですね。どうしてベルを鳴らすことを考えついたのでしょう。あのねこは、まるでさるみたいにりこうですね。」

人人はおどろいたり、かんしんしたりしました。みんながほめているのを聞きながら、エグランチーヌは、弟の命をたすけてくれたこのよいねこに、お礼をいいたいと思いました。

けれどもゾエちゃんは、このまえ、ぼうやをあぶない目にあわせて、やさしいご主人にきらわれたことを知っているので、みんなが、そんなにほめてくれることを、ほんとうだと思いませんでした。それでエグランチーヌのそばへはいかないで、屋根の上にかけあがってしまいました。

「ゾエちゃん！」

エグランチーヌがなんべんもやさしい声でよびましたので、ゾエちゃんはようじんぶかく、そろそろとひさしをつたわっておりてきて、はずかしそうにご主人のお部屋にはいりました。

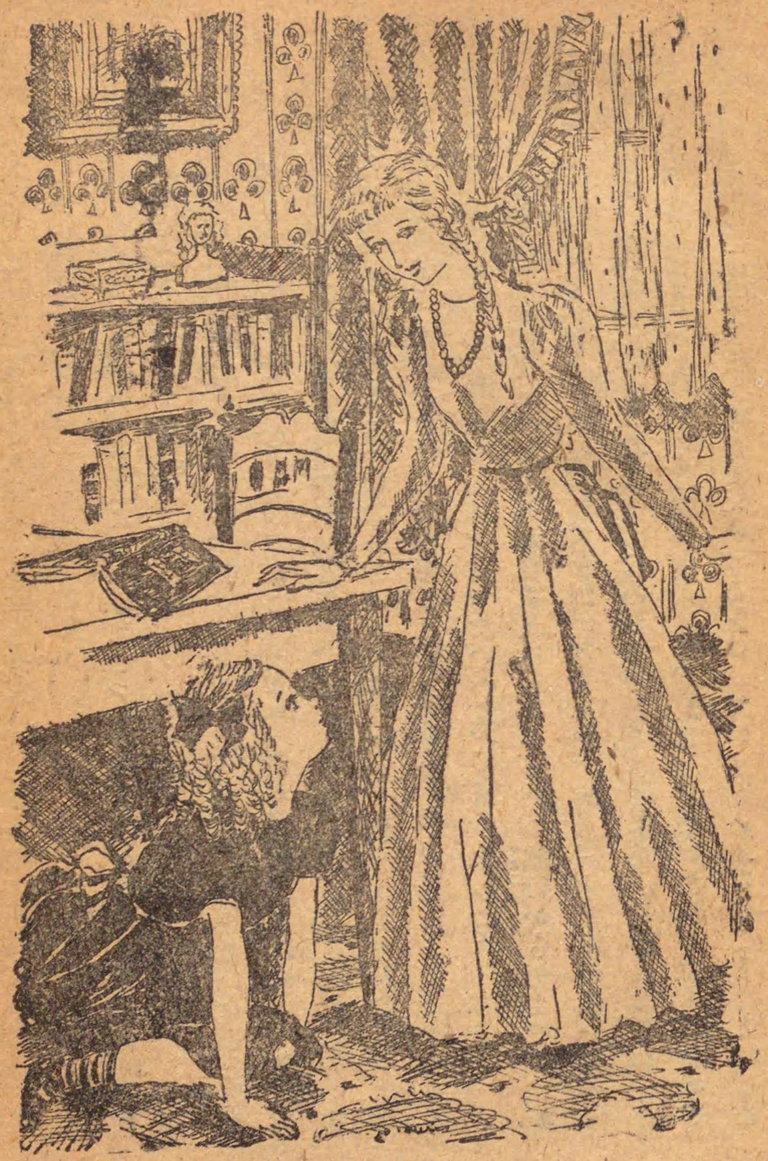
「あたし、もうちっとも、おこってやしないのよ。かわいいおりこうなおねこちゃん！」

と エグランチーヌがいいました。

「いつかおまえは、フレデリックのお目目をひっかいたわねえ。でも、こんやは、あぶなくやけ死ぬところをたすけてくれたのよ。おまえはじぶんのあやまちをすっかりとりもどしたのよ。さあ、ここへいらっしゃい！」

それでもゾエちゃんは、テーブルの下にもぐりこんだまま、そのかくれたばしょから出ないで待っておりました。あのすばらしいまほうのことばをいってもらうのに、こんなよい時が、またとあるでしょうか。ご主人からそのことばをいってもらいたいばかりに、なんという長いあいだ、いろいろとくろうをかさねてきたことでしょう。

とうとうエグランチーヌは、テーブルのそばへいって、いっしょうけんめいにいいました。



「ここへいらっしゃい！」

それは、とてもやさしい声でした。

「あたしが、いつか、おこごといったことを氣にしないでね。あたしは、もうおまえに、何もやかましいことをいいませんわ。ゾエちゃん、わたしは、おまえをゆるしますよ。」

エグランチーヌがこういったとたんに、まほうつかいのことばはあたりました。ゾエちゃんは、もとどおりのかわいい女の子のすがたにかえりましたが、からだが大きくなったので、テーブルの下からはい出すのに骨がおれました。

九　よいうそ

テーブルの下から、とつぜんかわいらしい小さなおじょうさんがあらわれたの見て、エグランチーヌは、びっくりしてしまいました。大きなきたならしいねこが出くのを待っていたのに、そのかわりに、まるで天使のようにきれいなおじょうさんが、にっこり笑いながら出てきたのですもの、おどろくのもむりがありません。

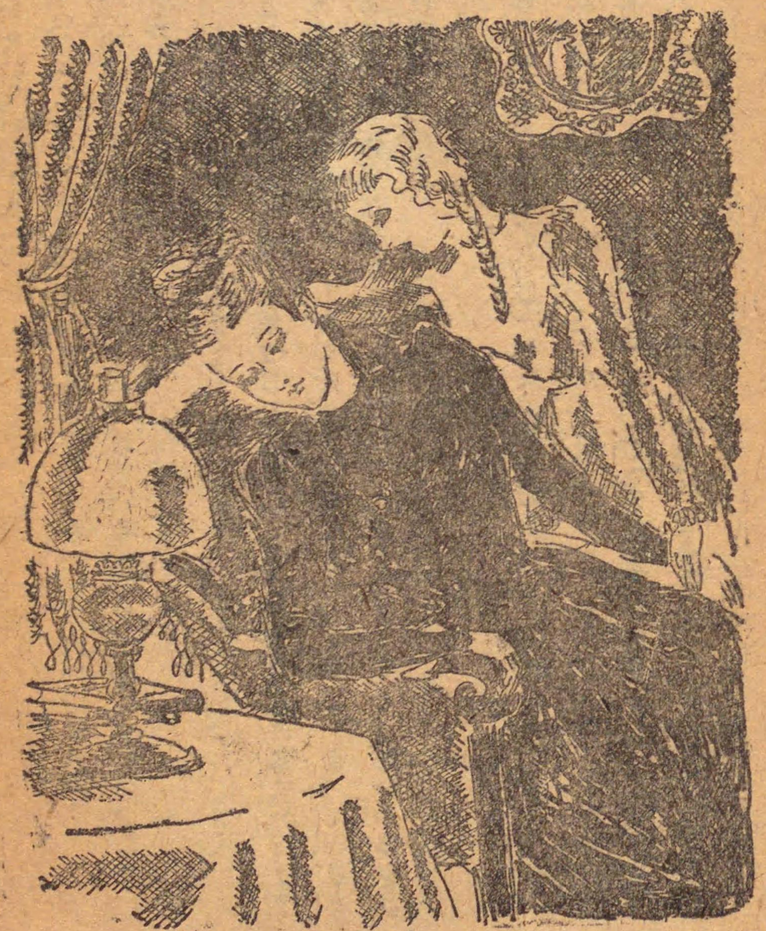
ゾエちゃんはよろこびに顔をかがやかせて、エグランチーヌのうでにすがりつきました。

「おねえさま、あたしゾエです。ほんとうのゾエですわ。」
と、ゾエちゃんはさけびました。
「どうぞはやく、はやくおかあさまのところへつれてってくださいな。おかあさまは、どんなによろこんでくださるでしょう。」
エグランチーヌは、ゆくえのわからなかったゾエちゃんが、ねこになっていたことを知って、一どはびっくりしましたが、りこうなおじょうさんだったので、これには、なにかふかいわけがあるのだと思いました。それにしても、ゾエちゃんがおかあさんをはやく見たくて、こんなにいっしょうけんめいになっている氣持、はよくわかりますものの、すぐおかあさんにあわせたら、あんなにひどい心配のあとで、きゅうに大きなよろこびにあったおかあさんが、びっくりして死んでしまったらたいへんだと思いました。
ゾエちゃんのおかあさんは、ちょうど五六日まえに、イタリヤの旅行からかえって、お家にいました。このよいおかあさんは、むすめがいなくなってから、六か月のあいだ、ずっと、病氣でした。氣ばらしの旅に出ても、なみだのかわくひまもありませんでした。
ゾエちゃんは、おかあさんをはやく見たいばかりで、かなしみにいたんでいるおかあさんの心が、いきなりこの大きなしあわせにあうことは、たいへんあぶないことだとは、ま

だ氣がつきませんでした。
エグランチーヌは、それをかわいそうに思って、ゾエちゃんをはやくおかあさんのところにつれていってあげるために、一つのつくり話を考え出しました。つまりこのきのどくなおかあさんの、せつない心配を、思いがけないしあわせに切りかえるために、いちばんだいじょうぶなやりかたをしようとしたのです。
ゾエちゃんのおかあさんは、むすめを思い出すさまざまの品物にかこまれて、まいにち、なみだにぬれてくらしていました。
エグランチーヌは、すぐさま、ゾエちゃんのおかあさんをおたずねして、
「おくさま、あなたのお心の、ふかい悲しい思い出をよびおこすようなことをもうしあげますのを、おゆるしくださいませ。」
と、はずかしそうにいいました。
「おじょうさま、どうぞお話しくださいな。あの子のことはもう、まいにち考えておりますもの、どうぞご心配なくお話しくださいませ。」
「へ、のう……ゾエちゃんがお見えにならなくなりましてから、あのお子さまのお身の上に

ついて、なにかお知せをうけたことはございませんの？」
「なにかお聞きになりましたのでしょうか？」
おかあさんは、目をかがやかせていいました。
「おお、どうぞおねがいです。どうぞお話しくださいまし。」
「わたくしは、たぶん、まちがえているかも知れませんわ。」
エグランチーヌは、しんせつなうそを、心の中でさがしながら、考えていいました。
「わたくしが、ぐうぜん聞いたのですけれど、……なんか月かまえに、あなたのおじょうさまとおない年くらいの小さいむすめさんを、おんなこじきがぬすんだのですって、そうして……」
「なんでございますって？　わたくしのかわいそうなゾエ!!　おまえは、まだいきていたの？」
おかあさんは、むちゅうになってさけびました。
あんまりはげしいおかあさんのようすに、エグランチーヌは、心配して考えました。そうしてしずかにこたえるのでした。
「ぬすまれたその子というのは、わたくしが見たわけではございませんから、あなたのお子

さまかどうか、はっきりしたことはわかりませんけれど、もしやおじょうさまのおじやしんでもかしていただければ、わたくしは、きっとさがして……」
「ごらんくださいな、このしゃしん!!」
と、おかあさんは話のとちゅ



うをさえぎって、いそいでいいました。
「これは、とてもよくにておりますの。けれどあの子は、もっときれいですわ。」
そういいながら、いつもじぶんのくびかざりにつけているロケットをはずして、しゃしんをとり出してみせました。
「ああ、神さま!!　もしさがし出すことができましたら!!」
とさけんだとたんに、おかあさんは、きぜつしてしまいました。家の人たちにかいほうされて、おかあさんが、いきをふきかえしたのを見て、エグランチーヌはかえっていきました。これでおかあさんに、のぞみをもたせて、だんだん心をつよくする、だい一歩をうまくやりとげたわけです。

おかあさんはうれしいやら、待ちどおしいやらまた心配やらで、一晩じゅう、ちっともねむれませんでした。あしたの朝は、きっとあのしんせつなおじょうさんが、かわいいゾエをつれてきてくださるだろうと、氣ちがいのようによろこんでみたり、そうかと思うと、すっかり氣がしずんで、そんなしあわせはあるはずがないとあきらめてみたりして、すこしもおちつかなかったのです。

あくる朝の十時ごろ、おかあさんは、がまんしきれないで、エグランチーヌのお家をたずねていきました。しんせつなおじょうさんは、にこにこして出てきましたので、おかあさんは、そのようすを見ただけで、これはきっとよい知らせがあったにちがいないと、考えました。
「おくさま、きっと、だいじょうぶですわ。」
と、エグランチーヌがいいました。
「こじきのところにいるその小さいむすめさんは、たいそうきれいなかみで、こがね色の毛なんですって——」
「家のむすめそっくりですわ。」
「その子の名は、アグラエ、またはゾエ。わたくしのうばが、その話をしてくれましたので、どっちがほんとだかお名まえをはっきり知ることができませんでしたの。この子は、青いひとみで、長い黒いまつげで、かみは、こがね色なんですって。」
「あの子です、あの子です！　ああ、もし、もう一ど見ることができたら？」
「こんばんお目にかかれるとぞんじますわ。」
と、エグランチーヌがいいました。

「おじょうさま、あたしもいっしょにまいりとうございます。」
おかあさまは、せきこんでいいました。
「おくさま、お氣をつけてくださいな。うっかりして、もし女こじきにかんづかれでもしたら、すぐバリからにげられてしまいますわ。そしたらもうおしまいですわ。ですからこのことは、どうぞわたくしひとりにおまかせくださいませ。夕方五時ごろには、きっとかえってきて、うれしいおしらせをすることができると思いますから。」
おかさんは、エグランチーヌのよくゆきとどいた、しずかな話をきいて、おとなしくうなづきました。

やくそくどおり、夕方の五時ごろになると、エグランチーヌがたずねてきました。おかあさんはかけよってきて、エグランチーヌにほおずりしてよろこびました。
「おわかりになりまして？　あたしの子。ねえ、あたしのゾエちゃんでございましょうねえ？」
「はい、おくさま。」
と、こたえたエグランチーヌの方が、かえってふるえているくらいでした。

「ほんとうに、おじょうさまでしたわ。わたくし、あの方とお話しましたの、けれど、あなたは、あしたでなくては、おあいになれませんわ。」
「どうして？　どうしてですか？」
と、おかあさんはつめよりました。
「それは……きょうは……」
と、エグランチーヌは、もう一どよういうそをさがしました。
「どうぞおっしゃってください。なぜきょう、あの子をだくことができませんの？」
「なぜって……」
エグランチーヌは、おだやかにほおえみながらいいました。
「こんな大きなよろこびに、たえられないほど、おくさまはしんけいしつになっていらっしゃいますもの。」
「いいえ、いいえ。」
と、あわれなおかあさんはさけびました。
「幸福は、わたくしを、つよくしてくれました。わたくしは死なないで、あの子を見ることができます。どうぞすこしもはやく、むすめをかえしてください！　おねがいです！」

その時、おとなりのお部屋で、小さい足音がしました。聞きおぼえのあるなつかしい足音！

「あっ、かえってきたのね。」

おかあさんは、お部屋からとび出しました。

「ゾエちゃん、ゾエちゃん!! おかあさまですよ！」

「おかあさまあ。」

かわいい声がこたえました。

「あたしよ、あたしかえってきてよ。」

ゾエちゃんは、家の人たちにまもられて、つぎの間からかけ出してきましたが、がまんしきれないで、おかあさんのうでの中に、たおれて泣き出してしまいました。

割當事務庁
譲渡図書

昭和二十三年六月一日印刷
昭和二十三年六月五日發行

空飛ぶ犬

定價（六十円）

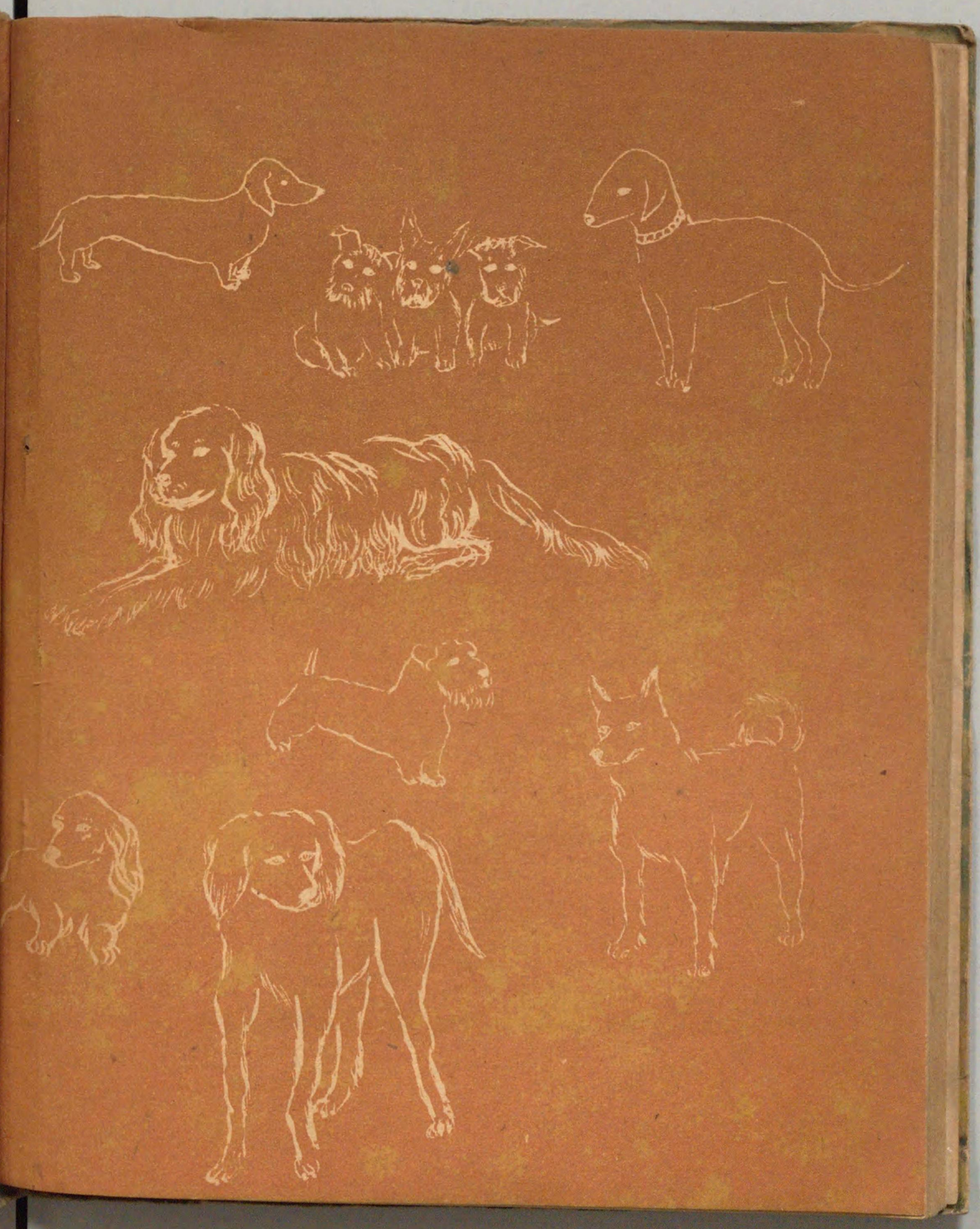
訳者　遠山陽子
東京都千代田区神田一ッ橋二ノ五

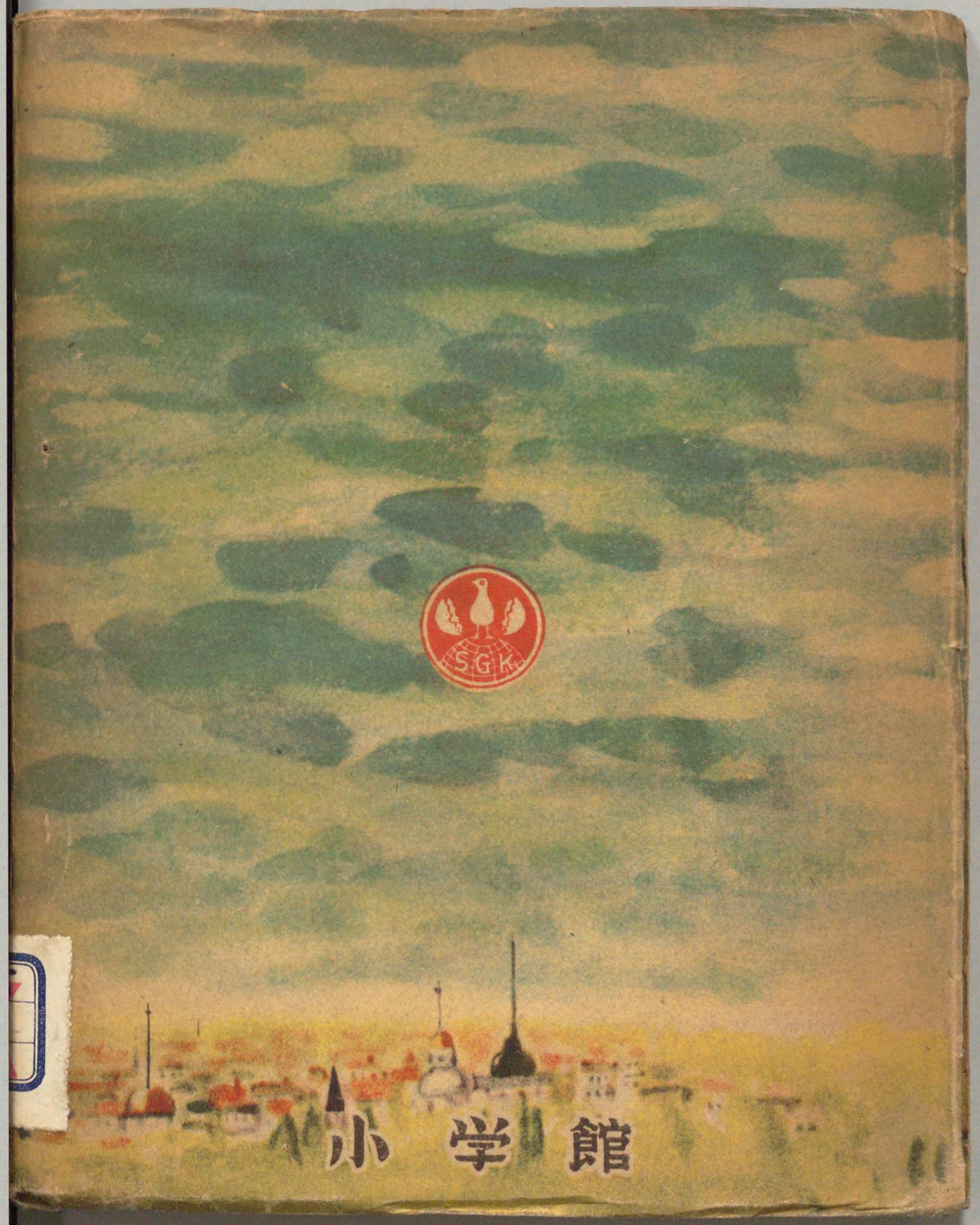
発行者　相賀徹夫
東京都中央区日本橋兜町三ノ一

印刷所　株式会社　一色活版所
東京都中央区日本橋兜町三ノ一

印刷人　吉田信賢
東京都千代田区神田一ッ橋二ノ五

発行所　株式会社　小学館
電話九段(33)一一二五
一一八一一九
会員番号A・一一九〇二七




S.G.K.
小学館